

NEWSLETTER No.123 TŌYŌ ONGAKU GAKKAI KAIHŌ
ISSN 1340-5578 The Society for Research in Asiatic Music January 28, 2025

一般社団法人 東洋音楽学会 会報 第123号

発行 一般社団法人東洋音楽学会
事務所 〒110-0005 東京都台東区上野3-6-3 三春ビル307号 TEL/FAX 03-3832-5152
●E-mail : LEN03210@nifty.com ●ホームページ : http://tog.a.la9.jp

目次

新会長挨拶.....	1	沖縄支部からのお知らせ.....	14
第75回大会レポート.....	2	ICTMD(国際伝統音楽舞踊学会)に関するお知らせ.....	14
通常理事会・総会議決事項のお知らせ.....	11	RILM(音楽文献目録)委員会からのお知らせ.....	15
臨時理事会議決事項のお知らせ.....	11	大谷紀美子氏の思い出.....	15
情報委員会からのお知らせ.....	12	会員異動.....	16
第42回田邊尚雄賞アンケートのお願い.....	12	図書・資料等の受贈.....	16
会員の受賞.....	12	新刊書籍.....	17
会費納入のお願いと会費割引制度のお知らせなど.....	12	新発売視聴覚資料.....	18
東日本支部からのお知らせ.....	13	編集後記.....	18
西日本支部からのお知らせ.....	14	第13回定時社員総会議事録(抄)・添付書類.....	19

新会長挨拶

早稲田みな子

2024~2025年度の2年間、会長を務めさせていただくことになりました。本学会には長年いろいろな形でお世話になってきましたが、会長の任に自分が就くことになるとは、夢にも思っておりませんでした。選挙結果が未だに信じられない気持ちですが、会員の皆さんが投じてくださった一票の重みを感じつつ、微力ながら学会に貢献できるよう努めています。

私はこれまで主に、東日本支部委員、ICTM(国際伝統音楽学会、現ICTMD=国際伝統音楽舞踊学会)担当委員、経理担当理事、そして東日本支部長として、当学会に関わってきました。特に、ICTM担当委員と経理担当理事としての経験が長く、その立場から学会の変化を体感してきました。ICTM担当委員は、2006年に当時の会長、塚田健一さんに依頼されてから2022年まで担当しました(塚田先生と呼びたいところですが、「先生」という呼称は使わないというのが東洋音楽

学会のやり方だと蒲生郷昭さんがいつも言っておられた、と小塩さとみさんから教えていただいたので、その伝統を尊重することにします)。当学会は、ICTMDの日本国内委員会を兼ねており、会員とICTMDの橋渡しの役割を担っています。当時、塚田さんは徳丸吉彦さんとともに、東アジア音楽研究者のスタディ・グループをICTM内に立ち上げることを目指しており、その任務も引き継ぐこととなりました。東アジア音楽研究会(Musics of East Asia=MEA)の発足に向けての準備大会が2006年夏に台湾で開催され、翌年、正式な第1回シンポジウムが上海音楽院にて開催されました。以来、MEAを通じてICTMDと関わりを持ち、ICTMDの世界大会にも参加する会員が増えました。また、現在ではMEA以外のスタディ・グループで活躍する会員も見られます。当学会に所属する研究者が国際的にも積極的に発信するようになってきているのは非常に喜ばしいことであり、その基盤を築いてくださった先達に、深く感謝せずにはられません。

経理担当理事は、2010年より断続的に2020年まで担当しました。この間に、会費受取用のPayPalアカウント、および大会用の銀行口座を開設しました(それまでは大会ごとに

開催地で銀行口座の開設・解約を行っていました)。またこの間、当学会は社団法人から一般社団法人へ移行しました。公益法人制度改革により、それまで社団法人として存在してきた団体は、一般社団法人か公益社団法人に移行することを余儀なくされ、当学会は、一般社団法人へ移行することになったのです。そのための定款の整備、所定の手続きに基づく財産の整理(公益目的支出計画の実施)が必要となり、この手続きが完了して無事一般社団法人への移行が完了したのは、つい3年前(2021年8月31日)となります。私が経理担当理事を務めた全期間が、この移行期間と重なっており、始めの頃は、当時の会長、薦田治子さんとともに煩雑な会計書類の作成に随分と頭を悩ませましたが、おかげで学会のお財布事情を具体的に把握することができました。また、定款をはじめとする諸規程の整備には、遠藤徹さんが大変にご尽力くださいました。現在、日本音楽学会が任意団体から法人への移行手続きを進めているところですが、本学会は1969年にすでに社団法人となっていました。第67回大会の特別展示「学会80年の歩みを振り返る」

(<http://tog.a.la9.jp/img/other/80th.pdf>)によると、社団法人化は1966年に創立30周年を迎えるにあたっての記念事業の一つとして始められ、その準備期間中には学会資金充実のための募金が行われ、会員から147万円が集まったとあります。社団法人設立の趣意書には、「わが国の伝統音楽の正しい継承のためにも、また東洋諸民族のすぐれた音楽の発展のためにも、本会が正式に国の認可を得、公的な資格を明確にした団体として活躍することは不可欠のものと考え、ここに社団法人東洋音楽学会を設立する」と記されています。現在、当学会の活動目的や意義は、さらに多岐にわたっていますが、理想的な運営を実施しやすくするために、いち早く法人化に取り組んだ諸先輩方に敬意を表するとともに、法人設立当初のこうした熱い志をしっかり引き継いでいかななくてはいけないという思いを新たにす次第です。

経理担当としては、毎年抱え込む赤字が大きな懸念事項でしたが、コロナ禍で状況が一変したのは全く予想外の出来事でした。各種会議、支部例会、大会がすべてオンライン化され、交通費、会場費が浮いたことで一気に支出が減ったのです。また、私が東日本支部長を務めた過去2年の間に、一部の希望者を除き、会報と支部だより・支部通信の郵送が停止され、ウェブサイトで閲覧する方式へと移行しました。これにより、印刷代、郵送料も大きく削減されました。メーリングリスト(ML)を通じた一斉配信メールも開始されました。

これからの2年間は、まさに過渡期といえます。MLについては、まだ全会員のメールアドレス登録が済んでいるわけではなく、今後、早急に整備を進めなくてはなりません。MLをきちんと機能させることで、会員の皆さんへの連絡を、よ

りスムーズ、かつタイムリーに行えるようにしたいと考えています。また、福岡正太会長の時代(2020~2021年度)に構想された現行支部の廃止が、先日(2024年11月16日)の総会で承認され、いよいよ実行に移されることになりました。移行措置として今年度中に各支部長と各支部委員からなる合同支部委員会を立ち上げ、2025年度の例会運営について検討し、2025年度には、合同支部委員会に代わって例会委員会を発足させ、新体制による例会運営を開始する予定です。コロナ禍をきっかけにオンライン開催が中心となった例会ですが、これを見直す意見も出てきています。全国どこからでも参加できるオンライン例会の利便性・経済的なメリット、対面ならではのコミュニケーションの質と量・会員同士の関係性の構築、これらのバランスをいかにとっていくかが、今後の重要な課題です。また、微減傾向にある会員数も気になることです。様々なバックグラウンドを持つ研究者や音楽家に魅力を感じてもらえる学会、積極的に関わりたいと思ってもらえる学会にしていくには、今後どのような工夫が必要なのか、真剣に考えていきたいと思えます。当学会をより良い方向へ発展させていくには、会員一人ひとりの協力が欠かせません。引き続き、皆様のお知恵とご助力を賜りたく、どうぞよろしくお願い申し上げます。

第75回大会レポート

(2024年11月16日~17日 東京学芸大学小金井キャンパス)

第1日(11月16日)

◇公開講演会

「近代日本音楽の復古と革新 鈴木鼓村と宮城道雄」

公開シンポジウム/SPレコード鑑賞/京極流箏曲公演

登壇者 和田一久(京極流箏曲三代宗家)

千葉優子(宮城道雄記念館)

コメンテーター スティーブン・G・ネルソン(法政大学)

趣旨説明・進行 遠藤徹(東京学芸大学)

司会 島添貴美子

第75回大会のオープニングを飾る公開講演会は、曇り空の秋の午後、東京学芸大学芸術館学芸の森ホールで始まった。進行の遠藤徹氏から、本学会が創設88年の米寿を迎えたことを伝えられ、身が引き締まる思いがした。京極流箏曲に関しても、初代会長田邊尚雄の学会葬で演奏されたというお話があり、一会員として大いに興味を引かれた。

登壇者の和田一久氏は、京極流の唯一の伝承者であり、ご高齢を押しての参加であった。和田氏には京極流関連の多く

の著作があり、本学会誌にも研究成果が掲載されている*。今回の発表は、鈴木鼓村について、平家琵琶の藤村検校との接点を始めとして音楽の背景が深く理解できる詳細なものであり、貴重な写真も目にする事ができた。一方、千葉優子氏は、宮城道雄の生涯について随筆等を引用し手際よく解説し、雨田光平との意外な接点も示し、古典の重視など京極流との類似性を指摘しつつ鈴木鼓村との立ち位置の違いを強調した。コメンテーターのスティーン・G・ネルソン氏は、さかのぼって雅楽の箏譜について述べた上で京極流の今後についても言及した。最後に遠藤氏が、鈴木鼓村と宮城道雄の音楽の違いには約20年という生まれ年の差が大きく影響していると指摘したが、シンポジウムを通じて十分に納得できるものであった。



休憩をはさみ、島添貴美子氏の解説によるSPレコード音源鑑賞が行われた。鈴木鼓村による「静」「紅梅」、宮城道雄による「水の変態」といういずれも貴重な音源で、登壇者の方々のご協力の賜物であった。最近ではSPレコードを見ることがない学生も多いので、このような企画は学会として非常に有意義なものであると感じた。

続いて、京極流箏曲公演として、和田氏による「巖島詣」「擣衣」の演奏が行われた。近年は大勢の場で演奏することがないところ特別に演奏して下さったもので、張りのあるお声で京極流の典雅な音色を伝える演奏であった。



今回のテーマについて、遠藤氏から、鈴木鼓村が「復古」で宮城道雄が「革新」というわけではなく、二人共が「復古と革新」を行ったものであること、さらに、もともとは「復古と革新」にしたかったとの説明があった。今回、二人の巨

匠を見直す機会を得て、両者の古典に立脚したとてつもない創造性を前に、「創新」という表現に同意した。

*和田一久「筑紫箏の座り方について―「弾箏式十二条」の解釈を通じて」『東洋音楽研究』62号(1996年)pp.51-59.

福田千絵

◇第41回 田邊尚雄賞授賞式・田邊尚雄賞授賞祝賀会

受賞者：平間充子

受賞対象：『古代日本の儀礼と音楽・芸能一場の論理から奏楽の脈絡を読む』(勉誠出版(発売) 勉誠社(制作)、2023年2月15日発行)

第41回 田邊尚雄賞授賞式は大会初日の公開講演会に引き続き、東京学芸大学芸術学芸の森ホールにて行われた。今年度は平間充子氏の『古代日本の儀礼と音楽・芸能一場の論理から奏楽の脈絡を読む』(勉誠出版)に授与された。田邊尚雄賞選考委員会金城厚委員長より贈賞理由の説明があったのち(詳細は会報121号、2～3頁に掲載)、小塩さとみ会長から賞状ならびに賞金が手渡され、平間充子氏より受賞の挨拶があった。

平間氏は東京藝術大学の先輩にあたる近藤静乃氏より受賞の一報を受け、またお茶の水女子大学のやはり先輩である小塩会長から授与された今の気持ちを、「感無量」という言葉で表現された。続けて、音楽学への道を後押ししてくれた古代史の恩師、博士論文の主査にあられた塚原康子氏ほか諸氏、思いがけぬご縁から出版社を紹介して下さった千田稔氏への感謝が縷々述べられた。また出版までの道のりや、自身の本学会との関わりなどにも触れ、今後の展望にも話が及んだ。10世紀以前の正史に見られる限られた音楽情報を、精緻に読み解き続けてこられた平間氏。これからは11世紀以降、そして「遊び」という方向性にも研究を展開される由だが、お話を聴きながら本授賞は、そうした史料への真摯な向き合いの賜物だと改めて感じた。今後のさらなるご活躍をお祈りしたい。



その後、辻調理専門学校 東京 Kitchen Lab PRISM に場所を移し、授賞祝賀会が行われた。司会は有澤知乃氏、乾杯の音頭は川口明子氏、参加者 60 余名。東京藝大の近藤氏の祝辞では、平間氏より時々にもらった印象深い言葉などが披露され、惜しめない敬意と賛辞が贈られた。平間氏からは会員へのメッセージとして、人との縁を大切にすること、そして研究成果を後世に遺すこと(論文を書く)という二点を挙げられた。コロナ禍以来、久しぶりの温かい食事を囲んでの懇親会は、留学生によるフルス(胡蘆絲)の演奏という余興も加わり、終始和やかな雰囲気にもまれ、盛会のうちに終わった。大会実行委員の心づくしのおもてなしにも感謝申し上げたい。

前島美保

第2日(11月17日)

◇研究発表 A-1 (司会: 前島美保)

算賀と朝観行幸における奏楽—平安時代初期を中心に—

発表者: 平間充子

本発表は、40歳以降10年毎に行われる祝賀である算賀と、天皇が太上天皇や皇太后に拝謁する行事である朝観行幸を対象として、儀礼の場で行われる奏楽の実態と意味を考察しようとしたものであった。算賀については、『新儀式』や藤原詮子の四十賀等を取り上げ、儀礼の構造、参加者の立場や役割、演目等が示された。朝観行幸については、特に奏楽の規定はないが、儀礼後には奏楽が行われていたこと等が示され、そこから後の御遊につながったのではないかとこの見解が述べられた。

会場からは、どうして御遊につながったのか、選曲に意味はあるか、との質問があり、各々、算賀と朝観行幸は共に年長者への儀礼として共通点が多く前者が後者に影響を与えた可能性があること、曲より人が重要、との回答があった。

傍聴者は大会1日目の田邊尚雄賞授賞式を欠席したが、発表者は今年度の受賞者であり、長年に亘る研究の一環であるうということが感じられた。

高瀬澄子

中世前期大神氏の笛に関連する資料 発表者: 根本千聡

本発表は、大神氏の笛に関する資料のうち、これまであまり注目されることのなかった『筆篋抄』、(楽記一)、『僧玄海笛譜等注文』を取り上げ、その資料的意義を検討しようとしたものであった。『註大龍笛要録譜』『秘曲抄』等に基づき京都方大神家の成り立ちやその後の嫡流と庶流の対立について概観した後、上記3点の概要が紹介され、資料の散逸には13世紀頃における大神家の衰退と関連があるのではないかと、この見解が述べられた。

会場からは、『懐竹抄』『懐中譜』をどう思うか、大神の楽譜と特定できるような特有の手があるか、との質問があり、各々、後世の成立であることや嫡流の正統性を主張するために作られた可能性もあること、現時点では不明、との回答があった。また、発表者より、資料の書写者やその背景についての補足があった。

資料の紹介を主とした発表であったが、その背景に見られる楽人達の動向は興味深く、今後の活用を期待したい。

高瀬澄子

江戸期吉原遊郭における「見世すががき」の変遷—文学史料と長唄譜を手掛かりに— 発表者: 青木慧

本発表は、遊郭における「見世すががき」の実態を、文学作品や現行の長唄を元に明らかにしようとするものであった。吉原の音楽史的意義に触れた後、初期には歌があったがやがて三味線のみになったこと、口三味線に似た擬音表現や長唄の旋律から音楽の実態がある程度判明することが示され、「見世すががき」の変遷は客層の変化に対応したものだったのではないかという見解が述べられた。

会場からは、変遷に風紀取り締まりの影響はなかったか、どのような音楽を演奏するかを誰が決めていたのか、歌に対する三味線は合の手だったのか、二艇掛け合いの描写はあるか、との質問があり、各々、政治的背景は今後の課題、楼主がいるが教育システムは不明、「合の手」と書かれている、図像では一人が多い、との回答があった。

個人的には、歌の排除という現象に興味をそそられた。博士論文に基づくこのことだが、他に類似の事例がないか等、研究の広がりを期待したい。

高瀬澄子

◇研究発表 B-1 (司会: 田中多佳子)

ウクライナの撥弦楽器コプザおよびバンドゥーラの文化史概観—ウクライナ語文献をもとに— 発表者: 柚木かおり

ウクライナのコプザとバンドゥーラという二つの類似した楽器については情報が錯綜しており、確かな根拠に基づいた探究が求められる。柚木氏の発表は、ウクライナ語・ロシア語文献やウクライナ人奏者へのインタビューに基づき、両楽器の差異とそれが生じた経緯を整理したうえで、それぞれの演奏実践の系統を丹念に分類した。二つの楽器は同一起源だが、名称の伝播には異なる経路があるという。また、従来の伝統を継承する流派に対し都市文化としてのアカデミックな流派が生じ、ソ連時代には国の意向を反映する音楽学校での実践も確立した。一方、スターリン期以降に地下活動を余儀なくされた伝統的な流派は1970~80年代に復興し、両楽器の定義を行ったという。フロアからの質問の一つはバンドゥーラの師範の資格に関するもので、奏者ギルドが非公開の資

格試験を行っているという回答がなされた。複数の流派の音楽の特徴をどう分類できるのか、さらなる調査の展開が期待される。

東田範子

オスマン帝国のメフテルと西ヨーロッパのトルコ趣味音楽の楽器の比較

発表者：山本宏子

山本氏の発表は、オスマン帝国の軍楽隊メフテルで実際に使用された楽器と、西洋のトルコ趣味の音楽における楽器を、様々な図像に基づき比較した。山本氏によると、トルコ趣味の音楽では、メフテルのチェヴギヤーンという鈴のついた音具の代用として金輪付きトライアングルが用いられ、やがて金輪なしの型へと移行した。また、シェレンバウム等として知られる象徴的な音具もチェヴギヤーンの変形だという。その変遷にはどのような価値観に基づく取捨選択があったのだろうか。作曲家や批評家の手記を精査することで、西洋による「トルコ」表象の作法とその変遷がさらに明らかになる可能性もあると思われる。なお、発表に関する図像やURLは配布資料に印刷されていたが、プロジェクターの使用を活かした表示があれば、視覚的にいっそう明快な理解が得られたかもしれない。

東田範子

A. クラウスの"La Musique au Japon"に収められた琉球関連楽器について

発表者：遠藤美奈

遠藤氏は、イタリアのピアニスト兼音楽学者クラウスがパリ万博時に発表した日本の楽器のカタログのうち、琉球楽器に関する記述を整理・再検討した。カタログには琉球楽器8点の写真と記述が含まれており、それらは三線および御座楽の楽器であると判断できるということだが、そのうち全貌が明らかではない2点について問題提起がなされた。一つは、三弦のギターとして記述されているカオタリという楽器である。胴が両面皮張りであることから太鼓と混同したのでは、というフロアからのコメントも出たが、クラウスが入手したものは棹付きであったという。もう一つは棹付きの排簫で、琉球の絵図には見られないものの、水戸徳川家に献上された琉球楽器の一つとして所蔵されていることから、御座楽の音律具として用いられたようである。これらの楽器はドイツの博物館に現存している。様々な資料と多角的な知見から、過去の音風景が次第に解明されていく意義を改めて感じた。

東田範子

◇研究発表 C-1 (司会：島添貴美子)

柴田南雄の民謡論と「世界音楽」—柴田南雄『音楽の骸骨のはなし』(1978)と『追分節考』(1973)の成立背景を中心に

発表者：長谷川由衣

発表の主旨は、柴田南雄のいわゆる「骸骨理論」が五線譜

では表現できないものを分析する理論であり《追分節考》は骸骨理論を下地に作曲されていること、そしてその背景に柴田が世界音楽を志向していたことの2点に集約されると思われる。

フロアからは「世界音楽構想は理解できるが、柴田の骸骨理論は4度協和音原理の曲を分析するには有効だが、そうでない音楽を分析することはできない。そのため骸骨理論を世界音楽構想と結びつけるのはどうかと思う」というコメントがあった。発表者の主張は五線譜で表現できないものを分析することが世界音楽へ繋がるということと思われるが、柴田と同時代人である小泉文夫の五線譜による分析に基づいた、いわゆる小泉理論にも世界音楽的な志向があることを考えると、むしろ当時のコスモポリタンの風潮が背景にあって、当時の人々によっていろいろな方法が模索されたと思えた方が、より明確に論を展開できるだろうと思われた。

島添貴美子

言葉の即興と伝承の困難—秋田県「掛唄」における伝承の試み—

発表者：梶丸岳

秋田県で行われてきた2つの掛唄大会(金澤八幡宮伝統掛唄大会と全県かけ唄大会)を例に、これらの大会の盛衰の歴史をたどった上で「うまくいかない掛唄伝承」を論じたものである。

日本各地で少子高齢化、過疎化、担い手不足などが問題となっているが、特に秋田県の人口は現在100万人を切っており、急速に人口が減少している地域の一つである。フロアからの質問やコメントが相次ぎ、このテーマについての関心の高さがうかがえた。長年、金澤八幡宮伝統掛唄大会に学生を率いて参加してこられた伊野義博氏からは、掛唄大会に参加し続けている学生はいないが、音楽教育に掛唄が取り入れられているというコメントがあった。民俗芸能研究は、滅びる芸能をどうするかという視点だけで済む時代は終わり、新しく生まれる芸能のあり方にも視野を向けつつ、研究者自身のフィールドにおける視点を、根本から見直さざるを得ない時代に入ったことが実感させられた。

島添貴美子

「彼の芸能」から「わが芸能」へ—大正主基の大嘗祭関連芸能を事例に—

発表者：三島わかかな

天皇の御代替わりの際に行われる大嘗祭では、新穀を献上する悠紀(ゆき)国と主基(すき)国が選ばれるとともに、悠紀・主基のそれぞれに風俗歌舞が新しく作られ献上される。発表ではこれらの風俗歌舞を「大嘗祭関連芸能」と称し、大正の大嘗祭を例に、悠紀国に選ばれた愛知県岡崎市(当時、六ツ美村中島)と主基国に選ばれた香川県綾川町(当時、山田村)の人々が、大嘗祭後に各々、保存会を組織してこれら

の芸能を伝承し続け、平成に入って地域間の芸能の交流が始まって、現在に至ることが報告された。

質疑応答では、大嘗祭関連芸能がどのように作られているかという質問があり、基本的に宮内庁の楽人が創作しているが、御田植芸能は地域の中で作られているとのことであった。フロアからは、明治選定譜に田唄の譜が入っているものの、一度も歌われたことはないことから、なんらかの理由で田唄に関しては地域で作ることになったのかもしれないという意見もあった。

島添貴美子

◇研究発表 A-2 (司会：配川美加)

明治30年代から40年代の京都における演奏会の諸相

発表者：丸山彩

丸山氏の発表は、19世紀末から20世紀初頭の京都で開催された演奏会を主に『京都日出新聞』と雑誌『音楽世界』『音楽界』から抽出して音楽ジャンルや開催目的に照らして分類し、明治35年設立の京都音楽会はじめ当時の京都の音楽団体の活動状況や演奏会場と関連づけて説明を試みるものだった。会場からは、京都帝大オーケストラの先駆けとなる活動がなかったのか、また京都の大学や芝居小屋での演奏会はなかったのか等の質問が寄せられ、司会者からは『近代歌舞伎年表 京都篇』にも演奏会(とくに邦楽)情報が含まれることが補足された。演奏会の研究は、特定の団体や会場に限定しない限り、とかく労多くして分析の難しいものだが、各地の音楽団体や聴衆、演奏会場の動向は中核となる都市の規模や特性を前提にしているはずで、演奏会の開催状況や内容がそれらとどう関わるのかをまずは丹念に読み解くべきではないだろうか。各地を事例にした演奏会研究の今後の進展に期待する。

塚原康子

明治・大正時代の虚無僧組織と臨濟宗寺院

発表者：マツ・ギラン

近年、明治4年の普化宗廃止後の虚無僧復興運動を精力的に調査しているギラン氏が今回取り上げたのは、京都東福寺の明暗教会よりも2年早い明治21年に虚無僧団体「普化教会」を設立した和歌山県由良町の臨濟宗妙心寺派寺院・興国寺の旧蔵史料である。現在、由良町教育委員会が管理する史料中には、明治21年に当時の住職・前田誠節が提出した「教会創立願」に付された「別冊普化教会規約」(全34条)があり、入会資格や行鉢(=托鉢)復活のための「證票」付与、生計費以外の剰余所得を妙心寺派の布教教育活動に充当することも規定されていた。また、明治22年から昭和22年に至る『普化教会会員名簿』には、350人の氏名・法号・住所・職業・宗派・年齢が記され、勝浦繁太郎(正山、1890年入会)、田中久雄(海童道祖、1832年入会)等も含まれるという。富

山や京都の虚無僧団体を含めた明治期の仏教界と尺八復興の関係の一層の解明と、貴重な史料の保全を願うものである。

塚原康子

◇研究発表 B-2 (司会：高松晃子)

初期ジブシー楽団の楽師像をめぐって—ツィンカ・パンナの受容を通して見る—

発表者：横井雅子

「ジブシー楽団」の始祖と言われるロマの女性楽師、ツィンカ・パンナ像の変遷に関する研究。その死の直後には、ロマらしさよりもむしろハンガリー人同然であることを是とする描き方だったものが、死後70年経つ頃には叔父や祖父の経歴や本人の「創作」に関する情報、外見の美化といった真偽不詳の情報が増えた。その変化はもちろん、その時々を社会的・政治的な状況からロマ楽師に求められるイメージの変化に呼応するのだが、フロアからは、付加されていく新たなツィンカ情報を「粉飾」と言い切つてよいのかどうか、という意見があった。また、最後に紹介されたコダーイの歌芝居におけるツィンカの描かれ方を巡って、ナショナリズムというよりむしろ国内におけるエキゾティシズムという観点からも説明できるのではないかという提案も、フロアからなされた。辺境に生きる人たちは内外からさまざまな視線を投げかけられる。ツィンカ本人はどう見られたかったのかは知る由もないが。

高松晃子

日本における《ウスクダラ》の受容の諸相をめぐって

—1950年代を中心に—

発表者：濱崎友絵

歌は世につれ世は歌につれ。トルコの「伝統的な」民謡とされる《ウスクダラ》が日本に入ってきたのは1950年代初頭のこと。1954年に4人の女性歌手により次々と出されたヴァージョンから童謡《トルコのおじさん》に至るまで、多種多様な《ウスクダラ》に会場は大いに沸いた。「これらは日本版オリエンタリズムにとどまらない日本化/内面化の側面を持つ」とは発表者の弁だが、「開放的な内容を堂々と述べている歌詞は、トルコの誤ったイメージを借りることで可能になったのでは」とのフロアからの意見も興味深く聞いた。さらに筆者の興味から言うと、下調べに使用した Wikipedia に、「クリミア戦争に派遣されたスコットランド兵のキルト姿を見たイスタンブール市民が、スコットランドの軍隊行進曲をもとにこの歌の原曲を作った云々」との記述を見つけて仰天した。この歌はひとつもスコットランド音楽に似ていない。民謡となるまでのプロセスにも相当な曲折があるに違いない。

高松晃子

◇研究発表 C-2 (司会: 小日向英俊)

映像発表: 『東臯琴譜』の特殊な指法「畧」について

発表者: 鳥谷部輝彦

明清琴譜の指法の字母「畧」は多く「田」と略記され、別の指法「細」も「田」と略記されるため、両者の違いがわからなくなっていた。歴代の琴譜の「指法注釈」では「細」古くからは「糸」などであらわれる一方、「田」があらわれるのは16世紀の『太音傳習』が最も早くここでは「細」か「畧」か不明となっていた。18世紀の『五知齋琴譜』ではじめて「細」と「畧」との区別が明確になる。それは、現代の琴家、顧梅羹の奏法「略吟」「略猱」の「略」が「極く短く、僅かな」を意味しているのと一致する。東臯禅師が日本に伝えた琴譜には「畧上」「畧拵起」「畧帯起」などが見られるが、或るテキストでは「畧」は「田」と略記される。この「畧」はいずれも「非常に短く」「非常にかすかに」の意と推測される。これは七絃琴の別の用語「虚音」に相当し、また崑曲などの「腔韻」といった中国音楽独特の音使いに類するであろう——以上が発表の要旨であるが、発表では中国の琴演奏家の演奏が再生され、とても理解しやすいものであった。傍聴者が「東臯禅師の琴譜にはさまざまなバージョンがあり、それらで「畧」は正しく伝承されているのか」と質問すると、発表者から「日本の『東臯琴譜』では「田」や「四」などと略記され、後者を見ると「略」が正しく伝承されたとは言えない」との回答があった。

長谷部剛

◇研究発表 A-3 (司会: 遠藤徹)

ピッチ測定を用いた薩摩琵琶・錦心流における語りの基本旋律の抽出と個人様式の分析

発表者: 曾村みずき・鎌木時彦 (非会員)

薩摩琵琶の錦心流の演奏者ごとの演奏スタイルを、計算機プログラムによるピッチ測定から可視化する試みで、個人様式や楽曲の場面による表現の相違がスライドで具体的に提示された。発表は基本旋律の抽出や分析結果等については曾村氏、技術的な説明は鎌木氏によって行われた。

質疑では、文化の継承にどのように貢献するか、ピッチ以外の要素の分析方法はあるかなどの質問が出され、前者については習得する際の参考になるのではと回答され、後者については口の動きの分析の試みの一端が紹介された。その他、演奏者の意識との関係をめぐる問答がなされたが、今後の研究で演奏者の意識とのズレや演奏者が意識していないところに何らかの法則性が見出されると、そこから新たな展開もあるかもしれないと思われた。

研究は緒についたばかりに見受けられたが、幹と枝葉の弁別や五線譜に依拠しない音の動きの可視化など、今後の薩摩琵琶の音楽分析の基礎となり得る方向が示され、今後の展開

が期待される発表であった。

遠藤徹

『博雅笛譜』羽塚啓明所写本の紹介と、林謙三五線譜訳の分析

発表者: 薛 静雯

林謙三「博雅笛譜考」は、その後の雅楽研究の礎となった重要な論考であるが、林が主たるテキストとした羽塚本は失われ、その内容は不明であった。薛氏の発表は、林が所持していた羽塚本の青写真による複製本を紹介したもので、同本が旧下郷本の謄写であること、倫秋本の系統であることなどが明らかにされた。

次いで未公表の林の五線譜訳が紹介され、そこに林の拍子構造についての見解を理解する糸口があることが示唆され、最後に林の基本旋律の考え方がかなり早い段階にできていた可能性が指摘された。

質疑では会場から只拍子をめぐるとの意見が出されたが、これについてはそもそも博雅笛譜の基本旋律は何を表したもののか、三五要録・仁智要録の冒頭の楽譜をどう解するか、早・延の問題とどう関わるか、中世の豊原家の笙譜に多数見える只拍子の楽譜をどう解するかなど、多くの未解明の課題が横たわっている。こうした難問に挑むにあたって林の見解を正しく把握することは不可欠であり、その意味でも興味深い発表であった。

遠藤徹

恩徳院の律管の来歴

発表者: 高瀬澄子

律管は調律具の一であるが、近世には実用的な用途に限られず、ある種の思想性をまもって学者等の関心をひいていた。高瀬氏の発表は、橘南谿『北窓瑣談』や林謙三「恩徳院の律管をめぐって」を踏まえた上で、「恩徳院の律管」の来歴を追ったもので、詳細な配布資料とともに、林論文に見える律管の多くが1930年代には散逸していたこと、詮芸・豊原敦秋作の「恩徳院」は1930年代まで京都の大通寺に伝来していたこと、同作の「年次」には様々な問題があることなどが示された。次いで模作や現存する律管をめぐるとの諸問題に言及され、最後に近世の律管への関心は、正しい音楽とされた真の雅楽を求めた古楽復興の動向と連動している可能性が指摘された。この見解に筆者は全く同感であり、今後の更なる検証も注目される。

なお、大通寺の律管は、2017年に高瀬氏が同寺に問い合わせた際には見たことはないという回答されたというが、実際には伝存している可能性が高いと思われるので、粘り強く継続調査をされることを期待したい。

遠藤徹

◇研究発表 B-3 (司会：早稲田みな子)

演奏分析を通してみる女性による歌三線演奏の特徴—男女間の比較検討を通して— 発表者：山本佳穂

今回、2つの事例による分析で指摘された女性の演奏の傾向(1.音高による発声の変化、裏声の使用 2.息継ぎ回数が多い)は、1については男女の声域の違い、2については肺活量基準値が男性より低い、という、男女の体格的な差の反映と見られるかもしれない。しかし発表後の質疑では学習歴の長さや、琉球古典音楽の習得以前に習得した他種目の音楽の如何を問う声があった。パワフルな演奏表現をする女性の存在という個人差も挙げられた。2つの事例には性差だけでなく、発声法の習得歴や技法の個人差などの背景があることに関心が向けられた。

山本氏は声の男女差に着目し、女性奏者の抱える演奏上の問題を指摘した。体格の平均値の男女差が問題であるとすれば、差を埋めるための習練方法を検討したり、平均値の差よりも演奏表現の洗練に気を配るなどの方向があらうか。女性奏者の今後の注目される。 奥山けい子

義太夫節の伝承における女流義太夫の役割に関する一考察

発表者：太田暁子

太田氏は1963年に始まった大日本素義会(現在：日本素義会)と、大正期には作られていた新作を取り上げた。

素義会の番組で出演者数の推移がわかり、助演者の記述から、稽古をつけている師匠の名と素人弟子の人数がわかる。史料をこのように読み込んでいく方法は興味深かった。

新作「お伽草 かちかち山の段」は2012年に鶴澤三寿々が補曲して以来たびたび上演されており、内容の紹介が手に入っていて生き生きとした発表だった。日本のラジオ放送の初期に、義太夫節とその女性奏者が頻繁に出ていたことも示された。義太夫節の女性奏者は劇場での芝居に関わることがないが、素人への稽古や放送の場で活躍していたことが裏付けられた。 奥山けい子

イスラームの音楽とジェンダー観—トルコの女性演奏家の活動に着目して— 発表者：鈴木麻菜美

鈴木氏は、注目されているネイ奏者へのインタビューを踏まえて、イスラームの音楽の変遷を考察した。大会テーマ「東洋・アジア音楽の復古と革新」に沿う発表でもある。

20世紀初め、オスマントルコ終焉とトルコ共和国建国の後、ネイは公の演奏の機会を失った。しかし1946年以来、イスラームの音楽は復古し、イスラームとネイは強く結びつけられ、奏者は男性中心であった。カラダウはそのような状況の中で、女性に似合わない楽器だと思われていたネイを習得し、高い技量を得て初のプロ女性奏者となった。そして男

性によるスーフィー音楽の輪の外で、ジャズやクラシック音楽のための新しい技術と場を開発してきた。女性の置かれた逆境をバネにして、ネイの音楽を革新したのである。

鈴木氏がイスラーム音楽の変遷をていねいに述べたことによって、カラダウの力に満ちた言葉の意味がよく理解できた。

研究発表 3B 会場で、山本氏は女性奏者の演奏を分析し、太田氏は女性奏者の層による伝承への貢献を明らかにし、鈴木氏は女性奏者個人の活動歴と思想を示した。女性奏者に対して3者3様の視線が注がれ、それぞれ有益な成果を得たと思う。 奥山けい子

◇研究発表 C-3 (司会：小日向英俊)

映像発表：絵語りポトゥアとして生きる

発表者：岡田恵美

インド・西ベンガル州の職人カースト・ポトゥアの30年前と今について、同州西メディニプル県ノヤ村の例をまとめた映像作品を視聴した。イスラム教徒だがヒンドゥー名と絵師を意味するチットロコルを自称し、ヒンドゥーとイスラムの2つの文化の中で巧みに生き、自ら描く伝統の縦長の絵巻物「ポト絵」を用いてヒンドゥーの村々を回り、歌いながら、神話や社会問題、環境問題、公衆衛生などを啓蒙し、庶民の暮らしを維持していくために働くポトゥアの姿、が印象に残った。中でも、将来の女性の社会進出と自立のために、女性に絵や歌唱の技術を教えてきたひとりの男性の活動と、その成果としての女性によるポト絵の制作並びに集団歌唱による絵語りの新たな創出と伝承は特筆されるだろう。そしてポト絵が単に村でのみ使用されるのではなく、現代のネット社会の中で、ポトゥアの伝統芸術作品としての価値と人気を得て、村外に販売され、人々の現金収入となっていることにも、時代の変化を感じ取れる、素晴らしい映像作品だった。

嶋和彦

◇研究発表 A-4 (司会：澤田篤子)

共同発表：仏教儀礼復元における方法と課題、展望—「如意輪講式」をめぐる—

発表者：柴佳世乃(代表)・近藤静乃・薦田治子
室生述成(非会員)

本研究は、2014年に平泉の世界文化遺産登録5周年記念として「如意輪講式」の儀礼と講式の復元が計画され、これに発表者が参画したことに端を発する。本講式は1997年に初めて紹介され、しかも唱導の大家である澄憲が書写山圓教寺に山籠して作った講式として注目された。

まず代表者の柴氏が「如意輪講式における〈ことば〉と〈声〉」として、日本文学の立場から、澄憲および本講式成立の経緯

と諸本の紹介、復元実唱の経緯、詞章の構造と節付けの関係、そして唱導と音曲とのかかわりに関する言説について、綿密な配布資料をもとに述べた。中でも本講式での対句の多用が明かされたのは興味深い。一般に、表白や講式では肝要部分に美しい対句が配されるが、本講式では随所に対句が用いられ、会衆の心を捉えんとする澄憲の意図が窺える。

音楽学の立場から、近藤氏の「如意輪講式」音声化への改訂一ことばから音曲へ」では、まず講式の復曲にとどまらず、僧俗による唱導の場の再構築をねらいとすることが確認された。そのため、柴氏の詞章分析を礎に、読み方などを検討した上、現行の《六道講式》の曲節をもとに復曲し、儀礼として持続可能な演唱を目指し、さらに、本講式を要とする儀礼の組み立ては、《六道講式》を核とする「二十五三昧式」に基づいたという。講式に続く〈伽陀〉や〈念仏〉は聴衆も唱和するよう配慮されたのは「唱導の場の再構築」の現れであろう。次いで、薦田氏の「中世音曲の復元プロセスと課題—平家と講式を比較して—」では、講式と共通点が多い平家を取り上げ、墨譜解読の実績を背景に、講式と平家の音楽様式や復元過程を比較しつつ、本研究における復元の問題を総括的に論じた。近藤・薦田両氏共々、復曲・復元の学術的な根拠の必要性を強調し、近藤氏が説明を省略した「音曲復元の課題と展望」では日本文学・音楽学・国語学が研究領域として示されていた。

仏教儀礼実践の立場から、室生師が「講式における伝承と「如意輪講式」実唱」として、講式独自、あるいは和文声明共通の語句の読み慣わしや、唱え方、音位などの具体例を交えて説明した。その上で本講式の第七門の後半を室生師が実唱し、末尾の〈伽陀〉と〈念仏〉は、師の先唱のもとに参加者が唱和し、唱導の世界の疑似体験ができたことは学会としても有意義だった。

領域を超えた豊富な発表内容で質疑応答の時間が僅かとなったが、フロアからは講式と平家の曲節に関連して「乙曲」に関するコメントと資料が紹介された。古来「声、仏事を為す」と言われるように、仏教儀礼は声を核とするいわば総合的宗教芸術であり、仏教儀礼の復元には音楽学を核とする諸領域の連携が必須である。特に講式は聴衆を感動せしめることばと声が肝要であり、また平家と講式の曲節の影響関係にも課題が残されている今日、本発表で日本文学領域からの成果が丁寧に示され、また平家研究の視点が加わったことは貴重である。今年、書写山圓教寺にて同寺蔵本により如意輪講式が厳修されたが、来年も同寺にて厳修予定とのこと、さらなる研究の進展が期待される。

澤田篤子

◇研究発表 B-4 (司会：有澤知乃)

国楽と妓生

発表者：中原逸郎

韓国では2000年以降、妓生(キーセン)に対する文化・社会史的研究が大きな進展を遂げた。その結果、20世紀前半の妓生が朝鮮総督府の管理と統制のもと、日本の芸妓と同様の検番(券番)制度や学校式の教習制度を採り入れつつ、都市における伝統芸能の継承主体となっただけでなく大衆音楽や映画にも進出し、朝鮮における女性像の新たな創出にも寄与したことが解明されている。

しかし本発表は驚くべきことに、そうした韓国側の妓生研究の膨大な成果を全く参照していない。それどころか発表者のオリジナルな研究成果といえるものも何一つ示されていない。他者の論文の引き写し以外では、事実関係に基本的な誤りが多すぎる。券番制度のルーツを博多に求めることには根拠がなく、掌楽院の女妓をその後の妓生と直結させる議論も成り立たない。崔承喜は本論の脈絡とは無関係であるし、「キーサン」という植民地用語の無批判な使用は危険ですらある。発表者は東アジアの芸妓伝統のマクロな比較研究を志向しているのかもしれないが、であればせめてその展望を明示し、それに照らして朝鮮の妓生伝統をどうみるかというご自身の視点を丁寧に説明するだけでもよかつたと思う。

植村幸生

清国留学生による音楽活動の展開—留学生団体としての「亜雅音楽会」を中心に—

発表者：郭君宇

曾志恣は沈心工、李叔同とともに、中国への洋楽導入・普及の先駆者として有名である。その曾志恣が1904年(光緒30年)に東京で旗揚げした、清国留学生による音楽団体が亜雅音楽会である。発表者によれば確認できる活動期間は5年程度であり、そのうちの3年間で演奏会が5回に及んだという。発表ではその構成員の調査から、人数、出身地等の属性、その後の進路などを明らかにするとともに、日中両国で同会の意義を高く評価する論調があったことも示した。

本発表は音楽教育者・曾志恣のいわば原点にあたる日本時代の活動にスポットを当てたもので、これまで十分には知られていない事実関係を丹念に明らかにするものであった。一方で、おそらく発表者が意図的に省略したのであろうが、曾志恣の(音楽)思想の系譜(特に啓蒙思想家・梁啓超との関係は重要)、音楽に限らない滞日留学生の結社や社会活動といったより広い脈絡も併せて提示することで、発展的な議論を呼び込むことができたと思う。なお質疑では同会の女性構成員数が問われ、わずか3名だったとのことだが、その3名は当然に当時のトップエリートであり、なかでも曾志恣の妻・曹汝錦は清末民初の有力政治家・曹汝霖の妹であったことをここで付言しておく。

植村幸生

**音楽・人・地域をめぐる関係性とその変化—JR 福島駅周辺
に流れる古関メロディを事例に—** 発表者：五十嵐美香

いわゆる「駅メロ」に「ご当地」にちなむ楽曲が採用される事例は数多い。福島市では、同市出身の作曲家・古関裕而の作品が、駅だけでなく市街の各所で積極的に採用されているという。発表者はそこに着目し、古関メロディが1970年代以降に市内各所に普及する過程を認識、発信、復興・活況、定着の四期に分けた上で、定着すなわち「地域に馴染む」ことを記憶・土地・日常・身体・継承の五つの側面から検討した。熱心な顕彰活動の甲斐もあって、古関メロディは福島市民に好意的に受け入れられ、人々をつなぐ紐帯となっているが、その次世代への継承には課題も残す、という結論であった。

ただ、発表者自身が述べるように、本事例がどれほど一般論へと展開可能なのかは今後の課題といえる。反対に、全国的に有名な古関の楽曲やそれが喚起する記憶、感情までも、福島という地域に無条件に結び付けて論じていないかも気になった。さらに言えば、駅メロ等が耳に慣れることと顕彰活動の成果がどちらも「馴染む」の語に集約可能なのか、そして本事例のように、意図的に選択、設定された楽曲を「環境(音)」としてサウンドスケープ論と接合させ得るのかも、疑問に思った点である。非常に身近な事例だけに、用語の精密性と議論の汎用性を高めていくことが今後のカギになると思われた。

植村幸生

◇研究発表 C-4 (司会：小塩さとみ)

アイヌのリズム感 発表者：千葉伸彦

発表者の長年の研究による多くの発見や課題の中から、今回はアイヌ伝統音楽の演奏におけるリズム感、特に拍節をどのように感じて演奏しているのかについて、権太アイヌの楽器トンコリの伝統曲「イケレソホテ」の演奏記録(演奏：西平ウメ、録音年：1958年)を題材に分析と検証が試みられた。この曲の前奏を開始する最初の短い音は、拍頭の音として聞きなされる場合が多いという。しかし西平が歌とともに「イケレソホテ」を演奏する資料を分析すると、歌に内在する拍節感と、複数の弦を同時に弾く音もたらす拍節感が一致しており、結果、先述の短い音はいわゆる「裏拍」として捉えるほうが、弾き手の感じていた拍節感の理解としてより合理的であることがわかる。

拍節感の捉え方の相違は聞き手の音楽的背景にも由来する。発表では、アイヌ音楽以外の例も示し、トンコリ奏者のリズム感を相対化しつつ、西洋音楽をベースとする音楽文化とは異なるアイヌ音楽のリズム体系を明らかにするプロセスの序段が提示された。時間の関係で言及されなかった「イケレソホテ」以外の2曲についてもぜひ続編を期待したい。

甲地利恵

**現代のブルガリア民謡歌唱の教育現場における発声法指導の
特徴** 発表者：玉置彩乃

ブルガリア民謡の魅力の一つはその独特な力強い発声法にあるが、現代のブルガリアではもはや、その独特の発声(かつてのように)生活の中で自然に体得することはできない状況にあるという。このことを踏まえ、発表では、社会主義の時代がブルガリア民謡のあり方にどのような変化をもたらしたか、またその変化の一つとしての呼吸法をはじめとする現代的「メソッド」の土台となる先行研究の概要紹介、そして現代のプロ民謡歌手の養成における指導法の事例2件(ブルガリア人学習者への指導、外国人学習者への指導)が報告された。系統的な訓練を必要とするようになった民謡は、この先どのように展開していくのか。ブルガリアだけではなく、他の民族の伝統音楽の今後を考える上でも、この研究の今後に大いに学びたいと本記者は思った。

発表者はブルガリア民謡の発声法を実際に学ばれ、発表で例示した練習曲は発表者による演奏であった。学習現場の人々へのていねいな聞き取り調査とともに、実践による実感に裏付けられた考察を進められていることが随所にうかがえた。次なる発表が心待ちにされてならない。

甲地利恵

**「よさこい文化」の幼児音楽教育への導入と展開②
—保育者養成校の地域連携活動から—**

発表者：山本華子・有村さやか(非会員)

近年、地域振興を目的に企画され創出された祭りを、新しい伝統として地域住民が主体的に受け入れ継承していくにはどのようなアプローチが有効だろうか。発表者の意図とは必ずしも合致しないかもしれないが、本記者はそのような問いを受け取ったように思う。

発表では小田原短期大学保育科の学生による「ODAWARA えっさホイおどり」の演舞体験に関し、保育者養成課程における教育効果という観点から、アンケート調査及びグループインタビュー調査による結果が報告された。演舞に取り組んだ学生らの多くが、単に授業だというだけでなく、主体的に取り組む、意識を高め、自身の成長を実感していったことが伺えた。体験を通じて資質と意識を高めた保育者の卵たちは、今後、幼児教育の場において、どのような教材化ないし導入を図り、子どもの発達段階に応じた実践をどのように展開するだろうか。またそれが小田原における新しい地域文化の継承にどうつながるだろうか。今後の展開とその報告が待たれる。

甲地利恵

通常理事会・総会議決事項のお知らせ

2024年10月6日(日)にweb会議システムZoomを用いて第25回通常理事会が、また11月16日(土)に東京学芸大学小金井キャンパスの芸術館(学芸の森ホール)において第13回定時社員総会が開催されました。以下にこれらの会議における議決事項のうち、特記すべきものをお知らせします。なお、定時社員総会の議決の詳細は、後掲の第13回定時社員総会議事録(抄)ならびに添付書類をご参照ください。

1) 新入会員について

理事会において、前回理事会(2024年4月7日)以降に申し込みのあった正会員14名の入会が正式に承認されました。

2) 参事委嘱について

山本佳穂氏に本部・総務(田邊賞担当)参事を委嘱することが承認されました。

3) 次期支部委員定数について

令和6年度からの支部委員の定数について、東日本支部11名、西日本支部6名、沖縄支部3名とすることが決まりました。

4) 定款施行細則変更について

総会で定款施行細則の変更が承認され、令和7年度(2025年9月1日)より、支部を置かない形で学会の例会を運営することとなりました。

臨時理事会議決事項のお知らせ

2024年11月17日(日)に東京学芸大学小金井キャンパス中央2号館(南講義棟)S406にて臨時理事会が行われました。以下に特記すべきものをお知らせします。

1) 役員の役割分担について

理事の役割分担、支部委員、参事、各種委員が以下のようになり決まりました。

理事

[会長] 早稲田みな子

[副会長] 小塩さとみ

[東日本支部長] ギラン,マット

[西日本支部長] 福岡正太

[沖縄支部長] 小西潤子

[常務理事] 近藤静乃、高松晃子、配川美加、濱崎友絵、前原恵美

[総務] 小塩さとみ(兼情報委員会担当)、近藤静乃(田邊賞担当)、高松晃子(情報委員会担当兼広報)、濱崎友絵、早稲田みな子

[経理] 配川美加、前原恵美

[広報] 土田牧子、高松晃子(兼総務情報委員会)

[機関誌] 奥中康人、前島美保、福岡まどか(兼西日本支部担当)

[東日本支部担当] 金光真理子

[西日本支部担当] 福岡まどか(兼機関誌委員会)

支部委員

[東日本] 鯨井正子、黒川真理恵、金志善、越懸澤麻衣、鈴木良枝、田辺沙保里、仲辻真帆、福田千絵、伏木香織、森田都紀、山本華子

[西日本] 大久保真利子、齋藤桂、島添貴美子、菌田郁、米山知子、劉麟玉

[沖縄] 遠藤美奈、高瀬澄子、塚原健太

参事

[総務] 佐藤舞弥、長澤文彩、李惠平、山本佳穂(田邊賞担当)

[広報] 井上環、今泉佳奈、神田花菜子、倉地真梨、

玉置彩乃、吉岡倫裕

[機関誌] 明石菜々実

[東日本支部] 岩崎愛、神村かおり、澤田聖也、清水春菜、武田有里、楮佳銘、長谷川由依、山内弾正、李嬌寒

[西日本支部] 志川真子

[沖縄支部] 多和田真理、鈴木杜萌

各種委員

[機関誌編集委員会] 明石菜々実、奥中康人、梶丸岳、福岡まどか、前島美保(委員長)、森田都紀

[会報編集委員会] 井上環、今泉佳奈、神田花菜子、倉地真梨、高松晃子、玉置彩乃、土田牧子(委員長)、吉岡倫裕

[情報委員会] 小塩さとみ(委員長)、高松晃子、塚原健太、長井覚子、仲辻真帆、山下正美、米山知子

[ICTMD(国際伝統音楽舞踊学会)] ギラン,マット

[東洋学・アジア研究連絡協議会] 田中有紀

2) 新入会員について

前回理事会(2024年10月6日)以降に申し込みのあった正会員7名の入会が承認されました。

情報委員会からのお知らせ

会員情報の登録について

会員のみならずには、最新のメールアドレスの登録および会報などのデジタル配信にご協力をいただき感謝いたします。すでに多くのメールアドレスに、会報などのデジタル版および研究集会などの学術情報を配信しておりますが、さらに多くの方からの「メールアドレス登録+郵送停止」を募っております。メールリストでの配信をご希望の方は、郵送を停止する旨、「東洋音楽学会会員名簿情報登録フォーム」でご登録ください。この登録の有無にかかわらず、大会案内を同封する9月発行の会報は会員全員に郵送されます。また住所変更など会員情報の変更もこの登録フォームから行えます。本学会ウェブサイトのトップ頁右上にある「会員の皆様へ」をクリックしてログインを行なうと、上記フォームにアクセスできます。ログインIDとパスワードは、会報第119号(全会員へ郵送)の3頁に記載しています。ログインに関するお問い合わせは情報委員会(togictmt@gmail.com)または学会事務局(LEN03210@nifty.com)までお送り下さい。

郵送停止希望を出されているにもかかわらず本号が郵送された会員の方は、メール配信に問題が生じている可能性がありますので、情報委員会へお問い合わせください。

第42回田邊尚雄賞アンケートのお願い

第42回田邊尚雄賞選考委員会では、新刊情報を広く収集しています。会員の業績を顕彰する貴重な機会ですので、著作物を出版される際は、選考委員会までお早めにお知らせ下さい。自薦のほか他薦も歓迎いたします。

選考対象：2024年1月1日～12月31日の発行物

締め切り：2025年2月3日(月)正午

記入事項：著者名、書名、発行年月日、発行所名。

なお、論文の場合は、掲載誌名・巻次・編集者名・論文頁数も記して下さい。推薦理由を簡潔にお書き添えいただいても構いません。

▶送付先：東洋音楽学会 第42回田邊尚雄賞選考委員会
(郵送)〒110-0005 東京都台東区上野3-6-3 三春ビル307号
(Fax) 03-3832-5152

(電子メール) LEN03210@nifty.com

※ご連絡の受け取り確認などは遅れる可能性もあります。

選考委員：海野るみ(委員長)、田中有紀、奥中康人、高瀬澄子、濱崎友絵

会員の受賞

本学会会員の徳丸吉彦さんが監修された『ビジュアル 日本の音楽の歴史』(全3巻)の出版に対し、株式会社ゆまに書房に学校図書館出版賞が贈られました。本書には、監修の徳丸吉彦さんの他、奥山けい子さん、黒川真理恵さん、野川美穂子さん、小塩さとみさん、塚原康子さんと多くの会員が著者として名を連ねています。

会費納入のお願いと会費割引制度のお知らせなど

1. 会費納入のお願い

2024年9月から新しい年度(2024年度)が始まりました。会費未納の方は、金額をお確かめの上お払ください。よう、お願い申し上げます。振込用紙を紛失された場合は、下記学会口座宛にお振ください。なお、本会報と入れ違いに納入された場合はどうぞご容赦ください。

正会員：8,000円

学生会員(大学院生を除く)、および割引申請者：6,000円

○郵便局からの払込

ゆうちょ銀行[口座番号] 00160-6-55723 [加入者名] 一般社団法人東洋音楽学会

○他金融機関からの振込

ゆうちょ銀行[支店名] 〇一九(ゼロイチキュウ)店(019)
[当座] 0055723

○オンライン決済サービスによる納入

ペイパル(PayPal)によるオンライン決済も会費が納入できます。学会ウェブサイトのトップページ(<http://tog.a.la9.jp/>)の「入会方法はこちら」をクリックし、「入会方法」のセクションをご覧頂くと納入ボタンがあります。オンライン決済にはペイパルへのログインが必要です。ペイパル・アカウントをお持ちでない方は、アカウントを開くと送金できます(アカウント開設費無料)。なお、オンライン決済には手数料が発生するため、納入金額は以下のようになります。

正会員：8,350円

学生会員(大学院生を除く)、および割引申請者：6,280円

2. 会費割引制度のお知らせ

本学会には、夫婦・親子割引、大学院生(博士課程・修士課程)・研究生割引の制度があります。それぞれ条件や申込方法が異なります。学会のホームページ

(<http://tog.a.la9.jp/about.html#7>)でご確認の上、お申し込みください。なお、大学院生の割引制度を受けるためには「大学院生会費減額措置願い」と学生証のコピーを、また研究生の割引制度を受けるためには、「研究生会費減額措置願い」と学生証のコピー、履歴書が必要です。次年度以降も継続して減額措置を希望する場合は、毎年、前年度末すなわち8月31日までに、「減額措置願い」を提出する必要があります。

3. 会費の滞納者へのご注意

滞納がありますと、会員の権利(研究会・大会での発表、学会の発行物の受取)が行使できないことがありますのでご注意ください。

4. 卒論・修論の発表者へのご注意

発表を機に入会された会員にも、新年度の会費納入義務が発生いたします。退会するためには退会届が必要です。その旨ご理解のうえ、会費の納入にご協力ください。

東日本支部からのお知らせ

1. 定例研究会のお知らせ

東日本支部では、2025年2月1日(土)に、第143回定例研究会をオンライン会議システムのZoomを使用して開催いたします。参加は事前申込制です。東日本支部のウェブサイト(<http://tog.a.la9.jp/higashi/index.html>)より、2025年1月28日(火)までにお申し込みください。申し込み締め切り後、例会前日までにミーティングコード等をお送りいたします。なお、本例会は当日に発表、質疑応答ともに行います。※初めてZoom例会に参加される方へ:参加にはWebカメラとマイクのついたPC、またはタブレット、スマートフォンなどが必要となります。

第143回 定例研究会(オンライン開催)

2025年2月1日(土)14:00~16:30(予定)

※最新情報は、学会HPをご覧ください

研究発表

「アニメ音楽」における「ジャンル」の問題—アニメBGMにおける和楽器奏者と作曲家のネットワークとコラボレーションの可能性—グロスバック・ギャレット(Wesleyan 大学大学院生)

参加申込締切:2025年1月28日(火)

2. 定例研究会発表募集(7月例会)について

東日本支部では、2025年7月5日(土)の定例研究会(オンライン開催)における発表を募集しています。

発表をご希望の方は、発表種別(研究発表・報告等)、発表題目、要旨(800字以内)、発表希望月、氏名、所属機関、連絡先(住所、電話、E-mail)を明記の上、2025年4月20日(日)までに、東日本支部事務局にメール(tog.higashi@gmail.com)でお申し込みください。

なお、発表希望をご提出後1週間経っても支部事務局から連絡がない場合には、メール事故等の可能性がありますので、お手数ですが、再度ご連絡ください。

3. 例会の参加申込について

例会の最新情報、及び「参加申込フォーム」は、支部のウェブサイトに掲載されます。ウェブサイトでは情報をチェックし、早めにお申し込みください。

4. 「東日本支部だより」の配信について

東日本支部では、原則として11月、3月、6月に、支部だよりを学会ウェブサイトから配信しています。最新号の発行は、学会メーリングリスト(ML)で告知し、URLを送信します。適宜アクセスのうえ閲覧し、必要に応じてダウンロード、印刷を行なってください。学会MLに参加していない方は、以下QRコード、あるいはURLから登録フォームにアクセスし、メールアドレスを登録してください。



URL: <https://qr.paps.jp/19Xb>

5. 「会員の声」投稿募集

東日本支部発行「東日本支部だより」には、会員の皆様から寄せられた情報を掲載する「会員の声」欄を設けています。研究会、講演会、展示会など、会員の活動に関連する情報がありましたら、東日本支部事務局までお知らせください。投

稿方法は、以下の通りです。

- 1) 次号締切：2025年2月10日(月)(3月上旬発行予定の「支部だより」に掲載します)
- 2) 原稿の送り先：東日本支部事務局
tog.higashi@gmail.com
- 3) 字数・書式：25字×8行以内(投稿者名明記のこと)
- 4) 内容：
 - ① 催し物、出版物などの情報
研究会、講演会、演奏会、CD、DVD、書籍出版、展示、見学会など
 - ② 学会への要望や質問
支部例会、大会、機関誌など、学会に対する感想や要望

* 原稿の採否は「支部だより」担当者にご一任ください。編集の都合上、お送りいただいた原稿に多少手を加えていただくことがありますので、ご了承ください。

年1月上旬を目途にご案内しあげる予定です。

第84回定例研究会は、2025年7月を予定しています。発表希望者を随時受け付けております。発表を希望される方は、4月18日(金)までに、発表種別(研究発表・報告等)、発表題目、要旨(800字以内)、氏名、所属機関、連絡先を明記の上、沖縄支部(okinawashibu.toyo@gmail.com)まで出来るだけメールでお申し込みください。発表希望のメールを送信後、1週間を経ても沖縄支部から連絡がない場合には、お手数ですが再度ご連絡ください。他支部会員の発表も歓迎致します。

沖縄支部事務局：

〒903-8602 沖縄県那覇市首里当蔵町1-4

沖縄県立芸術大学音楽学部 小西研究室気付

Tel/Fax 098-882-5016

メールアドレス：okinawashibu.toyo@gmail.com

西日本支部からのお知らせ

新支部委員会が発足いたしました。定例研究会の企画や発表希望は、以下の支部事務局までお申し込みください。

西日本支部事務局

〒565-8511 大阪府吹田市千里万博公園10-1

国立民族学博物館 福岡研究室気付

E-mail: fkenme@gmail.com

沖縄支部からのお知らせ

◇支部担当者交代について

令和6年度役員改選により、沖縄支部はこれから2年間、下記の支部担当理事、支部委員、参事が運営します。どうぞよろしくお願いいたします。

支部長：小西潤子

支部委員：高瀬澄子、塚原健太、遠藤美奈

参事：鈴木杜萌、多和田真理

◇定例研究会について

第83回定例研究会は、2025年2月を予定しております。詳しい内容は、決まり次第、学会ウェブサイトに掲載します。また、学会員以外の方々も聴講可能ですので、奮ってご参加ください。開催日時、発表等のタイトルにつきましては、2025

ICTMD(国際伝統音楽舞踊学会)に関するお知らせ

MEA(Musics of East Asia)シンポジウム報告

第8回MEA(Musics of East Asia)のシンポジウムは2024年8月23日-25日、国立民族学博物館にて開催されました。今回は、コロナ禍を経て6年ぶりに対面で行われ、発表者95名、ポスター発表17名、一般参加者を含め全体で125人の参加者がありました。その内、東アジア各地の参加者をはじめ、ヨーロッパ、アメリカ、東南アジアなど在住の発表者が最新の研究を披露しました。今回のシンポジウムでは、ラウンドテーブル、パネルディスカッション、ワークショップなど、多様な発表形態を含み、有意義な学術交流がもたれました。

初日の基調講演では、黄裕元(Huang Yu-Yuan)(国立台湾歴史博物館)が“Everyday Life and Imagination in Phonograph Records: Tshio-Khue Comedy Records from Taiwan’s Japanese Colonial Period”という題で20世紀前半の台湾のレコード文化について論じました。また、3日目の公開講演会・コンサート「アリアン峠の向こうは……在日コリアン音楽のこれから」では日本の多様な音楽文化を味わうことができました。

現地大会実行委員(敬称略、五十音順)は次の通りでした：小塩さとみ、マツ・ギラン、福岡正太、福岡まどか、劉麟玉、早稲田みな子

プログラム・コミッティー(敬称略、五十音順)は次の通りでした：Joys Cheung, Sheryl Chow, Huang Wan, Suzuki Seiko, Anna Yates-Lu, Matt Gillan.

次回のシンポジウムは2026年の夏(日程未定)、台北で開催する予定です。MEAの詳細については

<https://www.ictmusic.org/studygroup/mea> でご確認ください。

RILM(音楽文献目録)委員会からのお知らせ

◇『音楽文献目録オンライン』の状況

『音楽文献目録オンライン』では、既刊の『音楽文献目録』41号以降の文献をWebで公開中です。47号以降、事務局に情報が届いた文献については、2024年8月迄に選定された分までの文献の公開を順次開始しています。それ以降の文献も逐次公開される予定です。今後、40号以前の遡及入力も進め、会員のみならずには過去の目録も含めて検索・閲覧できるようになります。

また、『音楽文献目録オンライン』上の広告は2022年4月1日から開始し、現在1件掲載していますが、広告枠にはまだ余裕があり引き続き募集(5,000円〜)しています。なお、冊子体による遡及入力のための基金を募集しており、昨年度、当学会からも3万円の寄付をいただきました。今年度も同額の寄付をいただくことになっています。引き続き、ご協力をよろしくお願いいたします。

◇東洋音楽学会会員の『音楽文献目録オンライン』へのアクセス

本学会会報122号に同封された別紙に『音楽文献目録オンライン』にログインするためのIDとパスワードが掲載されています。それらを入力してアクセスしてください。会員限定情報であるため、今後会報には掲載しないこととなりました。IDおよびパスワードについてのお問い合わせは、情報委員会(togictcmt@gmail.com)までお送りください。

大谷紀美子氏の思い出

徳丸吉彦

大谷紀美子さんを私が知ったのは、1972年で、大谷さんがインド留学を終えて帰国されてからのことです。その後、大谷さんのパーラタナーティヤム・リサイタルを拝見し、感銘を受けました。大谷さんは、大阪から東京に来られると、よく我が家にお泊りになりました。ある朝、「小さな家は、暖房のスイッチにすぐ手が届くので便利だ」と言われました。

後に京都のご実家(西本願寺)を訪問して、その時の言葉を納得しました。私が1970年代に民族音楽学の勉強を始めた頃、Lomax, Alan *Folk song styles and cultures* (1968)にある計量舞踊学(choreometrics)の理解を大谷さんに助けて頂きました。

1985年1月にお茶の水女子大学を会場にして、国際伝統音楽学会のシンポジウム *The oral and the literate in music* が開かれました。準備委員として、大谷さんは、柘植元一さん・山口修さんとともに、委員長の私を助けてくださいました。大谷さんの提案で、シンポジウムに舞踊を含めました。その時の発表“*A verbal dance notation system in bhārata nāṭyam*”は、シンポジウム報告書(Tokumaru, Yosihiko: Yamaguti, Osamu (eds) *The oral and the literate in music*. Tōkyō: Academia Music, 1986)の193-205ページにあります。この頃から、大谷さんは、パーラタナーティヤムを実演するだけでなく、研究対象として考え始めたようです。

大谷さんは、ハワイ大学でバーバラ・スミス教授の指導を受け、琉球の組踊を扱われ、五線譜とラバノテーションを併記する斬新な方法を使って修士論文を提出されました。その後、ベルファーストのクィーンズ大学でジョン・ブラッキング教授の指導を受け、パーラタナーティヤムに関する博士論文を提出されました。

大谷さんは、日本における民族舞踊学の先駆者でした。そのため、いろいろな場面で頼りにされました。例えば、岩波講座『日本の音楽・アジアの音楽』(蒲生郷昭他(編) 東京: 岩波書店)に、「舞踊における身体運動の構造化—バラタ・ナーティヤムを事例として—」(第5巻、1989、249-268ページ)を執筆されました。また、私が *Garland encyclopedia of world music 7 East Asia China, Japan, and Korea* (New York: Routledge 2002)の編集で苦労していた時、東アジア舞踊の総説として、“Dance”(59-71)を執筆して助けて下さいました。

大谷さんは、舞踊の研究には、長い期間の身体訓練が不可欠と主張し、外から観察する方法を否定していました。上述のローマックスの計量舞踊学は、一定の方式で多様な舞踊を観察して、比較する方法です。私は、多文化を扱う際には、この方式が必要と考えています。こうした外部からの観察と、身体性を中心にする大谷流の方法を総合するのが、舞踊学の課題です。

この課題を解決して、いつか新しい舞踊学を構築して下さい、私には大谷紀美子さんに期待していましたので、この度の訃報に接して、まことに残念に思っています。

会員異動

個人情報のため削除

図書・資料等の受贈

(2024年8月～11月、到着順)

『宮城道雄著作全集 第5巻 著作世界』

宮城道雄記念館・千葉優子 編 講談社エディトリアル

『楽道』8,9,10,11月号 (公財)正派邦楽会

『東方學會報』No.126 (一財)東方学会

『能楽資料センター紀要』No.35

武蔵野大学能楽資料センター

『日本音楽学会会報』第122号 日本音楽学会

『諸塚神楽調査報告書』(CD-ROM付)

諸塚村教育委員会・諸塚神楽記録作成調査委員会 編

宮崎県東臼杵郡諸塚村

*Jiuta Sōkyoku Lyrics and Explanations: Songs of
the Floating World (SOAS Studies in Music)*

Christopher Yohmei Blasdel with Gunnar Jinmei Linder

Routledge

Music in Print: Selections from the Fung Ping Shan

Library & Western Rare Book Collection

University of Hong Kong Libraries

『一音成佛』第53号 虚無僧研究会

『音楽学』第70巻1号 日本音楽学会

『新しい音楽が息づくとき 一〇〇年前の日本のざわめきを読む』

春秋社音楽学叢書、井手口彰典・山本美紀 編著 春秋社
『美学論究』第四十編 関西学院大学美学芸術学会

新刊書籍

(ゴシック体の項目は賛助会員による刊行物)、価格(税込)

『秋岡教授の音楽学を愉しむ24の扉』

秋岡陽、音楽之友社、2,200円

『新しい音楽が息づくとき：一〇〇年前の日本のざわめきを読む』

井手口彰典、山本美紀、春秋社、3,080円

『絵で見て楽しい!はじめての和の音楽』

上野哲生、すばる舎、1,980円

『沖縄レコード音楽史：〈島うた〉の系譜学』

高橋美樹、ミネルヴァ書房、6,050円

『音と波の力学』

平尾雅彦、岩波書店、5,060円

『おんがくえほん こっけん』

樹原涼子、五味太郎、音楽之友社、2,200円

『音楽科教育はなぜ存在しなければならぬのか：「良い音楽科教育」を構想するための目的論』

長谷川諒、明治図書出版、2,706円

『音楽の力と市民：協創の文化資本』

本田洋一、水曜社、2,970円

『音楽も人を救うことができる』皆川達夫(著)、樋口隆一(編)

日本キリスト教団出版局、3,960円

『音源分離・音声認識』

大淵康成(編)、武田龍(著)ほか
コロナ社、4,180円

『音盤を通してみる声の近代：日本、上海、朝鮮、台湾』

劉麟玉、福岡正太ほか、スタイルノート、3,300円

『雅楽のひみつ 新版 見かた・楽しみかたがわかる本 伝統の和楽器超入門』

日本雅楽會(監修)、メイツ出版、2,585円

『歌唱・合唱指導のヒント：こんなときどうする?』

富澤裕、音楽之友社、2,420円

『歌舞伎 研究と批評 69 特集・古浄瑠璃とその周辺』

歌舞伎学会、文学通信、2,563円

『歌舞伎で日本文化論』

田口章子、雄山閣、2,640円

『神が喜ぶ音楽：大木こおける音楽の役割』

チャールズ・ロウ、国書刊行会、3,520円

『カントリー・ミュージックの地殻変動：多様な物語り』

永富真梨、大和田俊之、河出書房新社、2,640円

『魚山余響略註：江戸時代後期、西本願寺の声明事情を読む』

藤皮蓮風、法藏館、13,200円

『近代日本思想史大概』 飯田泰三、法政大学出版局、4,400円
『心が動く授業づくり 楽しもう!ボディアリズムで音楽を表現しよう』

清水宏美、山本晶子、株式会社全音楽譜出版社、2,640円

『斎藤秀雄 レジェンドになった教育家』

中丸美繪、音楽之友社、3,080円

『周縁化された芸能者と近世社会』

吉田ゆり子、吉川弘文館、14,300円

『世阿弥：能の本を書く事、この道の命なり』

西野春雄、ミネルヴァ書房、3,850円

『撰定期古記録の研究』

倉本一宏、思文閣、8,800円

『撰期政治』

吉村武彦(編)ほか、岩波書店、3,080円

『育つ幼児たち：子と親の関係を見直す』

高橋恵子ほか、金子書房、1,980円

『ちんどん屋：宣伝・広告と芸能のハブとなる生業』

山崎達哉ほか、大阪大学出版会、2,530円

『津軽三味線の誕生 新装版：民俗芸能の生成と隆盛』

大條和雄、新曜社、2,860円

『伝統芸能と民俗芸能のイコノグラフィー〈図像学〉』

児玉絵里子、錦正社、1,980円

『東寺百合文書 第十六巻』

京都府立京都市・歴史館(編)、思文閣、15,400円

『長崎游学6「もってこーい」長崎くんち入門百科(改訂版)』

長崎くんち塾、長崎文献社、1,540円

『日本往生極楽記・続本朝往生伝』

大曾根章介(校注)ほか、岩波書店、1,001円

『日本古代官僚制の研究』

早川庄八、岩波書店、12,100円

『日本古代の儀礼と社会』

西本昌弘、八木書店、11,000円

『日本の楽楽』

横道万里雄、岩波書店、16,500円

『入門ポピュラー音楽の文化史：(戦後日本)を読み直す』

輪島裕介、永富真梨、ミネルヴァ書房、3,080円

『能楽金剛流の歴史と四季の能』

金剛情羅華、淡交社、2,530円

『脳と音楽』

伊藤告介、世界文化社、1,980円

『<バッハのシチリアーノ>は真作なのか?』

竹澤栄祐、音楽之友社、2,750円

『語はたまにとびますが「うた」で読む日本のすごい古典』

安田登、講談社、1,980円

『ブルックナーのしおり：生涯と作品へのアプローチ』

石原勇太郎、音楽之友社、4,070円

『平安期物語における継子譚受容：孝子説話型継子譚との比較研究から』

森あかね、和泉書院、9,350円

『マンガでわかる雅楽：鑑賞ポイントを押さえて楽しむ雅の極み』

遠藤徹、誠文堂新光社、1,980円

『歴史と学ぶ教養としてのオペラ』

島田優理子、ベレ出版、1,980円

新発売視聴覚資料

●CD

- 『いちまでいん』 宮里政則、RMNR-001、2,000円
『茨城吟詠 薫風』 滝ヶ崎溪翔ほか、COCJ-42419、2,200円
『祝いの琴 ～春の海～』 沢井忠夫ほか、COCJ-42338、2,300円
『大空の虹／初舞』 おもだか秋子、VZCG-10589、1,500円
『沖縄ニービチソング決定盤』 RES-350、3,200円
『慶雲 ～広島新歌謡吟詠集～』
平賀輝山ほか、COCJ-42334、2,300円
『尺八空間曼陀羅 三橋貴風 普化古典本曲集1』
三橋貴風、COKM-45282、(配信限定)
『定番！寄席雑子集』
松山うめ吉(監修)、COCJ-42387-8、3,300円
『闘牛士のマンボ／禅』
村岡実、ザ・ジョーカーズ、COKM-45222、(配信限定)
『中島勝祐創作賞 第13回 創作曲『かぎろひ』』
かぎろひの会、VZCG-852、3,300円
『ほろよい小唄』 うめ吉、COCJ-42386、3,000円
『悠久のしらべ 二胡 ～さよならの向う側～』
土屋玲子ほか、COCJ-42335、2,200円

会報編集委員会

理事：増野亜子、土田牧子(継続)、高松晃子(新)

委員：山本華子

参事：井上環、今泉佳奈、神田花菜子、倉地真梨、玉置彩乃、
吉岡倫裕

編集後記

会報第123号をお届けします。今号は昨年11月に東京学芸大学において開催されました第75回大会のレポートが中心となります。レポート掲載にあたりましては、多くの会員の方々に執筆のご協力をいただきましたこと、この場をお借りして心より御礼申し上げます。また、今号には、同大会の総会資料を末尾に掲載しています。併せてお目通しくださいませ。

総会の議決により、広報担当の理事も交代となります。増野亜子理事が今号で退任となり、高松晃子理事が新理事として加わってくださいます。次号より高松・土田両理事の担当にて編集をいたします。どうぞよろしく願い申し上げます。また、委員の山本華子さんも今号をもって退任となります。山本さんの長きにわたるご協力に感謝申し上げます。会員の皆様には、今後とも会報の発行にご協力、ご支援を賜りますよう、どうぞよろしく願い申し上げます。

土田牧子

第13回定時社員総会議事録(抄)・添付書類

1. 日時：令和6年11月16日(土) 16:40-18:00

2. 場所：東京学芸大学小金井キャンパス 芸術館 学芸の森ホール

3. 出席者：292名(委任状提出者148名、書面議決書提出者76名を含む)

〔備考〕正会員520名、定足数261名

4. 議事事項と審議の経過及び結果

定款第19条により会長が議長となり、定足数を確認の上、開会を宣言した。次いで定款施行細則第16条により副議長を要請し、加藤富美子氏・三島わか那氏が選出された後、以下の議事を開始した。第2号議案から第4号議案の採決は、澤田篤子監事による「監査報告書」【添付書類9】の説明の後に行われた。

第1号議案 役員選任の件

奥山けい子選挙管理委員会委員長より「役員選出資料」【添付書類1】について説明があった。議長がこの承認を議場に諮ったところ、絶対多数(書面による原案賛成を含む)の賛成を得て可決承認された。

第2号議案 令和5年(2023年)度事業報告の件

遠藤徹理事(総務担当)より「令和5年(2023年)度事業報告」【添付書類2-1】、「処務の概要」【添付書類2-2】について説明があった。議長がこの承認を議場に諮ったところ、絶対多数(書面による原案賛成を含む)の賛成を得て可決承認された。

第3号議案 令和5年(2023年)度収支決算の件

配川美加理事(経理担当)より「収支計算書」【添付書類3-1】、「収支計算書に対する注記」【添付書類3-2】について説明があった。議長がこの承認を議場に諮ったところ、絶対多数(書面による原案賛成を含む)の賛成を得て可決承認された。

第4号議案 令和6年(2024年)8月31日現在貸借対照表および正味財産増減計算書の件

配川美加理事(経理担当)より「貸借対照表」【添付書類4-1】、「正味財産増減計算書」【添付書類4-2】について説明があった。議長がこの承認を議場に諮ったところ、絶対多数(書面による原案賛成を含む)の賛成を得て可決承認された。

第5号議案 令和6年(2024年)8月31日現在会員異動状況の件

遠藤徹理事(総務担当)より「会員の異動状況(2023年9月1日～2024年8月31日)」【添付書類5】について説明があった。議長がこの承認を議場に諮ったところ、絶対多数(書面による原案賛成を含む)の賛成を得て可決承認された。

第6号議案 定款施行細則変更の件

遠藤徹理事(総務担当)より「定款施行細則変更の件」【添付資料6】について説明があった。議長がこの承認を議場に諮ったところ、第13条2項の文言について意見があがった。その結果、議長より、第13条2項について「支部ごとに50音順に配列」という文言を削除し、「選挙用会員名簿には、正会員の姓名を記載する。」とする修正提案がなされた。議長がこの承認を議場に諮ったところ、賛成207(委任状145を含む)、反対3、保留6(委任状3を含む)で可決承認された。

第7号議案 その他

議長より発議を諮ったところ、金城厚会員より、名誉会員の選出及び決定手順の方針について意見があがった。議長より、今回の意見は次の理事会に引き継ぐとの回答がなされた。

審議終了後、報告事項として、以下の報告があった。

報告事項1. 令和6年(2024年)度事業計画の件

遠藤徹理事(総務担当)より「令和6年度(2024年度)事業計画」【添付書類7】の報告があった。

報告事項2. 令和6年(2024年)度収支予算の件

配川美加理事(経理担当)より「収支予算書」【添付資料8】の報告があった。

報告事項3. その他(1)現行支部廃止後の例会運営について

遠藤徹理事(総務担当)より、現行の支部廃止後は、会報第121号で周知した通り、例会委員会を設立して運営を行う予定であるとの報告があった。

報告事項4. その他(2)情報委員会からの報告

小日向英俊理事(情報委員会担当)より、電子メールを活用した学会情報発信への移行を検討しており、その関連で個人情報保護の方針を作成中であること、現時点の個人情報保護方針案を次期の理事会に引き継ぐことについて報告があった。

※「令和6年(2024年)度事業計画の件」【添付書類7】、「令和6年(2024年)度収支予算の件」【添付書類8】については、『会報』第121号(2024年5月31日発行)12～15ページの「第24回通常理事会添付書類」をご覧ください。

[第13回定時社員総会 添付書類1]

役員選出資料

1. 2024年度役員選挙開票結果

- (1) 有権者数 530名 (2024年7月27日現在)
- (2) 理事・監事被選挙権停止者および休止者数 13名
- (3) 理事被選挙権休止者数 7名
- (4) 投票用紙発送日 2024年7月27日(土)
- (5) 投票締切日 2024年9月1日(日) 消印有効
- (6) 開票日時 2024年9月7日(土) 午前10時より午後5時
- (7) 開票場所 お茶の水女子大学文教育学部2号館110室
- (8) 開票に立ち会った会員数 0名
- (9) 投票者数 140名 (投票率26%)
- (10) 有効封筒数 135通 (無効投票5 (内訳: 無記名0、締切後消印5))
- (11) 開票結果

①監事

総票数270票
有効票数266票 (うち白票20) 無効票数4票

順位	得票数	氏名
当選1	27票	塚原 康子
当選2	19票	永原 恵三
次点3	15票	金城 厚
4	13票	野川 美穂子
5	11票	尾高 暁子
6	10票	奥山 けい子
7	9票	植村 幸生
8	7票	加納 マリ
8	7票	横井 雅子
10	6票	前島 美保

(6票未満省略)

②理事

総票数1080票
有効票数1076票 (うち白票59) 無効票数4票

順位	得票数	氏名
当選1	65票	早稲田 みな子
当選2	57票	小塩 さとみ
当選3	46票	福岡 正太
当選4	33票	高松 晃子
当選5	29票	福岡 まどか
当選6	26票	小西 潤子
当選7	24票	奥中 康人
当選8	21票	近藤 静乃

当選 8	2 1 票	前原 恵美
当選 1 0	2 0 票	前島 美保
次点 1 1	1 9 票	梅田 英春
次点 1 1	1 9 票	加納 マリ
次点 1 1	1 9 票	配川 美加
1 4	1 8 票	ギラン, マット
1 4	1 8 票	土田 牧子
1 6	1 7 票	田中 多佳子
1 7	1 4 票	井上 貴子
1 7	1 4 票	金光 真理子
1 7	1 4 票	濱崎 友絵
2 0	1 3 票	井口 淳子
2 0	1 3 票	岡田 恵美
2 0	1 3 票	奥山 けい子
2 0	1 3 票	横井 雅子
2 4	1 2 票	梶丸 岳
2 4	1 2 票	島添 貴美子
2 6	1 1 票	高瀬 澄子
2 6	1 1 票	伏木 香織
2 8	1 0 票	井上 登喜子
2 8	1 0 票	ネルソン, スティーヴン G.

(1 0 票未満省略)

2. 選出過程

① 選出方法

理事・監事の選出については、定款施行細則第 8 条から第 13 条までの各条に準拠し、選挙管理委員会の定める選出要項に基づいて行われた。

② 監事の選出

9 月 7 日に①の通り開票を行い、集計結果を出した。

③ 理事の選出

9 月 7 日に①の通り開票を行い、集計結果を出した。これらの選出者、順位、票数を付記した結果は、最高得票者および会長に報告した。また、その結果は最高得票者を通して選出理事にも知らされた。

定款施行細則第 8 条に基づき、選挙管理委員会は、理事当選者 10 名に対して、他の 5 名を合議することを求めた。合議の結果、金光真理子、ギラン、マット、土田牧子、配川美加、濱崎友絵の 5 名が理事として推薦された。

3. 2024年度役員選任原案

(1) 監事 2名

塚原 康子 永原 恵三

(2) 理事 15名

奥中 康人	配川 美加
小塩 さとみ	濱崎 友絵
金光 真理子	福岡 正太
ギラン, マット	福岡 まどか
小西 潤子	前島 美保
近藤 静乃	前原 恵美
高松 晃子	早稲田 みな子
土田 牧子	

(一社) 東洋音楽学会 2024年度選挙管理委員会

奥山 けい子 (委員長)
井上 登喜子 (副委員長)
黒川 真理恵
齊藤 紀子
村山 佳寿子

〔第13回定時社員総会 添付書類2-1〕

令和5年度(2023年度)事業報告

(自令和5年(2023年)9月1日至令和6年(2024年)8月31日)

〔1〕研究発表会および学術講演会の開催(定款第5条1)

(1)公開講演会の実施(定款施行細則第3条1)

- ・日時 2023年11月18日
- ・会場 京都教育大学
- ・課題 「研究者・伝承者・教育者の幸せな連携を考えるー京都の六斎念仏をめぐってー」

(2)研究発表大会の実施(定款施行細則第3条2)

- ・日時 2023年11月19日
- ・会場 京都教育大学
- ・発表件数 28件(共同発表・映像発表を含む)

(3)次年度大会の準備

- ・日時 2024年11月
- ・会場 東京学芸大学

(4)定例研究会(定款施行細則第3条3)

○東日本支部

- ・回数 6回(第136回～第141回 12・2・3・4・6・7月)
- ・会場 オンライン開催
- ・内容 研究発表、卒業論文・修士論文・博士論文発表ほか

○西日本支部

- ・回数 4回(第297回～第300回 9・3・6・7月)
- ・会場 大阪大学会館 21世紀懐徳堂スタジオ、京都市立芸術大学伝音セミナールーム、オンライン開催
- ・内容 研究発表、創作作品上演、修士論文発表ほか

○沖縄支部

- ・回数 2回(第81回～第82回 2・7月)
- ・会場 オンライン開催
- ・内容 研究発表ほか

〔2〕学会誌および学術図書の刊行(定款第5条2)

(5)機関誌『東洋音楽研究』の刊行(定款施行細則第3条4)

○第89号の編集・刊行

- ・内容 会員の論文、研究ノート、資料、書評ほか

(6)会報の刊行

○『東洋音楽学会会報』

- ・第119号(2023年9月)、第120号(2024年1月)、第121号(2024年5月)
- ・内容 会員への諸通知、理事会・総会記録、大会開催案内、大会レポート、
図書・視聴覚資料紹介、会員消息

- 『東日本支部だより』(Webのみで公開)
 - ・第63号(2023年11月)、第64号(2024年3月)、第65号(2024年6月)
 - ・内容 東日本支部定例研究会の開催案内・報告、会員の声ほか
- 『西日本支部だより』(Webのみで公開)
 - ・第100号(2023年10月)、第101号・第102号(2024年5月)
 - ・内容 西日本支部定例研究会の開催案内・報告、巻頭エッセイ、支部会員への諸通知ほか
- 『沖縄支部通信』(Webのみで公開)
 - ・第49号(2024年3月)、第50号(2024年8月)
 - ・内容 沖縄支部定例研究会の開催案内・報告、支部会員への諸通知ほか

〔3〕関連学協会との連絡および協力(定款第5条3)

(7)日本学術会議への協力

- 日本学術会議協力学術研究団体として協力

(8)音楽文献目録委員会への参加

- 会員三名を委員として派遣

(9)国際伝統音楽舞踊学会(ICTMD)への協力

- 日本国内委員会として加盟

(10)東洋学・アジア研究連絡協議会への参加

- 会員一名を委員として派遣

〔4〕研究の奨励および研究業績の表彰(定款第5条4)

(11)「田邊尚雄賞」(定款施行細則第3条5)

- 第40回田邊尚雄賞の授賞

- ・日時 2023年11月18日

- ・受賞者および受賞対象

- 早稲田みな子『アメリカ日系社会の音楽文化—越境者たちの百年史』

- 2022年3月20日発行、東京：共和国、ISBN978-4-907986-71-1

- 第41回田邊尚雄賞の選考と発表

- 平間充子『古代日本の儀礼と音楽・芸能一場の論理から奏楽の脈絡を読む』

- 2023年2月15日発行、勉誠出版(発売)、勉誠社(制作) ISBN978-4-585-37006-2

〔5〕研究および調査(定款第5条5)

(12)国内または国外における学術調査および研究

とくになし

〔6〕その他目的を達成するために必要な事項(定款第5条6)

(13)東洋音楽学会ホームページを通して行なう学会情報の提供

(14)独立行政法人科学技術振興機構(JST)電子アーカイブ事業への参加

(15)「人間文化研究機構国立民族学博物館との連携に関する協定」の遂行

(16)国際伝統音楽舞踊学会(ICTMD) MEA(Musics of East Asia)の共催

[第13回定時社員総会 添付書類2-2]

2. 処務の概要

[1] 役員等に関する事項

2023年度(令和5年度)末現在

職名	勤務	氏名	任期(開始)	担当職務	報酬	所属など
理事	非常勤	小塩 さとみ	2022/11/12	会長、総務 ※会長就任日は11/13	なし	宮城教育大学
理事	非常勤	遠藤 徹	2022/11/12	副会長、総務	なし	東京学芸大学
理事	非常勤	早稲田 みな子	2022/11/12	東日本支部長	なし	国立音楽大学
理事	非常勤	藤田 隆則	2022/11/12	西日本支部長	なし	京都市立芸術大学日本伝統音楽研究センター
理事	非常勤	小西 潤子	2022/11/12	沖縄支部長	なし	沖縄県立芸術大学
理事	非常勤	梅田 英春	2022/11/12	機関誌	なし	静岡文化芸術大学
理事	非常勤	小日向 英俊	2022/11/12	常務、総務	なし	東京音楽大学
理事	非常勤	近藤 静乃 (本姓 青木)	2022/11/12	常務、総務	なし	東京藝術大学他
理事	非常勤	高松 晃子 (本姓 南)	2022/11/12	常務、経理	なし	聖徳大学
理事	非常勤	竹内 有一	2022/11/12	機関誌、西日本支部担当	なし	京都市立芸術大学日本伝統音楽研究センター
理事	非常勤	土田 牧子 (本姓 奥中)	2022/11/12	広報	なし	共立女子大学
理事	非常勤	配川 美加	2022/11/12	常務、経理	なし	東京藝術大学他
理事	非常勤	福岡 まどか	2022/11/12	機関誌、西日本支部担当	なし	大阪大学
理事	非常勤	増野 亜子 (本姓 城島)	2022/11/12	常務、総務、広報	なし	東京藝術大学他
理事	非常勤	横井 雅子 (本姓 片岡)	2022/11/12	東日本支部担当	なし	国立音楽大学
監事	非常勤	岡崎 淑子	2022/11/12	監査	なし	聖心女子大学名誉教授
監事	非常勤	澤田 篤子	2022/11/12	監査	なし	大阪教育大学名誉教授

支部委員 [東日本支部] 金光真理子、鯨井正子、鈴木良枝、田辺沙保里、仲辻真帆、濱崎友絵、
福田千絵、伏木香織、前島美保、森田都紀、山本華子(2023年9月～)

[西日本支部] 大久保真利子、岡田恵美、神野知恵、齋藤桂、島添貴美子、竹内直

[沖縄支部] 高瀬澄子、塚原健太、三島わかな

参事 [本部] 青木慧、井上環、今泉佳奈、神田花菜子、小林美季子、岸美咲、
倉地真梨、小島冴月(2023年10月～)、齋藤穂歌、玉置彩乃(2024年4月～)、
長澤文彩、西浦まどか(～2024年4月)、根本千聡、淵上ラファエル広志、
松村麻由(～2023年10月)、吉岡倫裕

[東日本支部] 岩崎愛、小尾淳、神村かおり、澤田聖也、清水(松浦)春菜、武田有里、
長谷川由依、増田久未(～2023年10月)、村治学、山内弾正、李嬌寒(2023年10月～)

[西日本支部] 細野桜子、吉岡倫裕

[沖縄支部] 小川恵祐、鈴木杜萌(2024年4月～)、多和田真理

[2] 職員に関する事項

2023年度(令和5年度)末現在

職名	氏名	採用年月日	担当事務	手当	交通費	備考
職員	金子由美子	1997/10/22	事務一般	月額80,000円	実費支給	

〔3〕 会議等に関する事項

(1) 理事会

開催年月日	議 事 事 項	会議の結果
第23回通常理事会 2023年10月8日 (令和5)	1. 新入会員承認の件 2. 令和4年度事業報告の件 3. 令和5年8月31日現在 財務諸表の件 4. 令和4年度総括収支決算の件 5. 長期滞納者処理の件 6. 令和5年8月31日現在 会員異動状況の件 7. 参事および委員委嘱の件 8. 定款施行細則変更の件 9. ICTM(国際伝統音楽学会)の学会名称変更にもなう日本語表記の変更について	承認 承認 承認 承認 承認 承認 承認 承認
第24回通常理事会 2024年4月7日 (令和6)	1. 新入会員承認の件 2. 令和6年度研究発表大会および公開講演会の件 3. 令和6年度事業計画の件 4. 令和6年度収支予算の件 5. 第41回「田邊尚雄賞」受賞者決定の件 6. 第42回「田邊尚雄賞」選考委員選任の件 7. 令和6年度日本学術振興会育志賞の学会推薦の件 8. 長期滞納者処理の件 9. 参事および委員委嘱の件 10. 次期理事定数および支部委員定数の件 11. 「ICTM 国内委員会運営内規」変更の件	承認 承認 承認 承認 承認 承認 (無し) 確認 承認 承認 承認

(2) 総会

開催年月日	議 事 事 項	会議の結果
第12回定時社員総会 2023年11月18日 (令和5)	1. 令和4年(2022年)度事業報告の件 2. 令和4年(2022年)度収支決算の件 3. 令和5年(2023年)8月31日現在貸借対照表および正味財産増減計算書の件 4. 令和5年(2023年)8月31日現在会員異動状況の件 5. 定款施行細則第13条変更の件 ・ 令和5年(2023年)度事業計画の件 ・ 令和5年(2023年)度収支予算の件 ・ 支部制度の件	承認 承認 承認 承認 承認 報告 報告 報告

(3) 各種委員会 (○印は責任者)

●会報編集委員会

○増野亜子、井上環、今泉佳奈、神田花菜子、倉地真梨、玉置彩乃(2024年4月～)、土田牧子、西浦まどか(～2024年4月)、山本華子、吉岡倫裕

●機関誌編集委員会

○福岡まどか、梅田英春、岸美咲、島添貴美子、竹内有一、中安真理

●情報委員会

○小日向英俊、太田暁子、竹内直、塚原健太、仲辻真帆

●田邊尚雄賞選考委員会

○金城厚、海野るみ、田中有紀、千葉優子、野川美穂子(以上、第41回)

海野るみ、奥中康人、高瀬澄子、田中有紀、濱崎友絵(以上、第42回)

[第13回定時社員総会 添付書類3-1]

一般社団法人東洋音楽学会

収 支 計 算 書

令和5年9月1日から令和6年8月31日まで

(単位:円)

科 目	年度予算額	決 算 額	差 異	備 考
I 事業活動収支の部				
1. 事業活動収入				
基本財産運用収入	500	730	△ 230	
基本財産利息収入	500	730	△ 230	
特定資産運用収入	100	24	76	
特定資産利息収入	100	24	76	
入会金収入	0	0	0	
会費収入	3,870,000	4,217,727	△ 347,727	
正会員会費収入	3,600,000	3,947,727	△ 347,727	
賛助会員会費収入	150,000	150,000	0	
特別会員会費収入	120,000	120,000	0	
事業収入	1,164,000	1,155,500	8,500	
機関誌発行収入	350,000	312,000	38,000	
大会広告料収入	365,000	314,000	51,000	
大会参加費収入	324,000	339,500	△ 15,500	
懇親会費収入	75,000	147,000	△ 72,000	
食料費収入	50,000	43,000	7,000	
その他事業収入	0	0	0	
補助金等収入	0	0	0	
負担金収入	0	0	0	
寄付金収入	0	0	0	
寄付金収入	0	0	0	
雑収入	0	157	△ 157	
受取利息収入	0	125	△ 125	
雑収入	0	32	△ 32	
事業活動収入計	5,034,600	5,374,138	△ 339,538	
2. 事業活動支出				
事業費支出	6,516,000	5,105,413	1,410,587	
給料手当支出	1,200,000	1,128,666	71,334	
臨時雇賃金支出	250,000	191,980	58,020	
法定福利厚生費支出	5,000	4,517	483	
旅費交通費支出	317,000	242,654	74,346	
通信運搬費支出	847,000	467,176	379,824	
消耗什器備品費支出	0	0	0	
消耗品費支出	52,000	95,583	△ 43,583	
賃借料支出	820,000	763,391	56,609	
印刷製本費支出	649,000	349,695	299,305	
諸謝金支出	300,000	108,000	192,000	
租税公課支出	10,000	600	9,400	
負担金支出	172,000	202,000	△ 30,000	
会議費支出	51,000	5,751	45,249	
広報普及費支出	400,000	326,339	73,661	
田邊尚雄賞関連費支出	150,000	114,104	35,896	
会場運営費支出	144,000	214,245	△ 70,245	
機関誌作成費支出	800,000	564,457	235,543	
例会運営費支出	145,000	23,375	121,625	
懇親会費支出	75,000	201,000	△ 126,000	
保険料支出	0	0	0	
事務委託費支出	0	0	0	
食料費支出(雑支出①)	60,000	63,180	△ 3,180	
慶弔費支出(雑支出②)	20,000	9,185	10,815	
手数料支出(雑支出③)	31,000	24,096	6,904	
雑支出(雑支出④)	18,000	5,419	12,581	
管理費支出	550,000	528,000	22,000	
事務委託費支出	550,000	528,000	22,000	
事業活動支出計	7,066,000	5,633,413	1,432,587	

一般社団法人東洋音楽学会

(単位：円)

科 目	年度予算額	決算額	差異	備考
法人税等の支払額	0	0	0	
事業活動収支差額	△ 2,031,400	△ 259,275	△ 1,772,125	
II 投資活動収支の部				
1. 投資活動収入				
基本財産取崩収入	0	0	0	
特定基金取崩収入	2,040,000	130,000	1,910,000	
田邊尚雄賞基金取崩収入	150,000	130,000	20,000	
研究推進事業基金取崩収入	1,890,000	0	1,890,000	
固定資産売却収入	0	0	0	
投資有価証券売却収入	0	0	0	
敷金・保証金戻収入	0	0	0	
投資活動収入計	2,040,000	130,000	1,910,000	
2. 投資活動支出				
基本財産取得支出	0	0	0	
特定資産取得支出	0	0	0	
固定資産取得支出	0	0	0	
投資有価証券取得支出	0	0	0	
敷金・保証金支出	0	0	0	
投資活動支出計	0	0	0	
投資活動収支差額	2,040,000	130,000	1,910,000	
III 財務活動収支の部				
1. 財務活動収入				
借入金収入	0	0	0	
基金受入収入	0	0	0	
財務活動収入計	0	0	0	
2. 財務活動支出				
借入金返済支出	0	0	0	
基金返還支出	0	0	0	
財務活動支出計	0	0	0	
財務活動収支差額	0	0	0	
IV 予備費支出				
予備費支出	△ 8,600	0	△ 8,600	
当期収支差額	0	△ 129,275	129,275	
前期繰越収支差額	0	2,286,250	△ 2,286,250	
次期繰越収支差額	0	2,156,975	△ 2,156,975	

〔第 13 回定時社員総会 添付書類 3－2〕

一般社団法人東洋音楽学会

収支計算書に対する注記

1. 資金の範囲について

資金の範囲には、現金預金、短期金銭債権債務、前渡金、仮払金、預り金及び前受金を含めることとしている。なお、前期末及び当期末残高は次の2.に記載のとおりである。

2. 次期繰越収支差額に含まれる資産及び負債の内訳

(単位：円)

科 目	前期末残高	当期末残高
現金預金	2,311,867	1,747,394
未収金	642,000	954,000
仮払金	0	10,683
計	2,953,867	2,712,077
未払金	383,365	130,000
預り金	12,252	12,252
前受金	272,000	412,850
計	667,617	555,102
次期繰越収支差額	2,286,250	2,156,975

[第13回定時社員総会 添付書類4-1]

一般社団法人東洋音楽学会
(様式1-1)

貸借対照表

令和6年8月31日現在

(単位:円)

科 目	当 年 度	前 年 度	増 減
I 資産の部			
1. 流動資産			
現金預金	1,747,394	2,311,867	△ 564,473
未収金	954,000	642,000	312,000
仮払金	10,683	0	10,683
流動資産合計	2,712,077	2,953,867	△ 241,790
2. 固定資産			
(1) 基本財産			
定期預金	5,200,000	5,200,000	0
基本財産合計	5,200,000	5,200,000	0
(2) 特定資産			
研究推進事業基金	6,946,000	6,946,000	0
田邊尚雄賞基金	590,000	720,000	△ 130,000
特定資産合計	7,536,000	7,666,000	△ 130,000
(3) その他固定資産			
什器備品	7	7	0
書籍	363,500	363,500	0
差入敷金	300,000	300,000	0
電話加入権	2,000	2,000	0
その他の固定資産合計	665,507	665,507	0
固定資産合計	13,401,507	13,531,507	△ 130,000
資産合計	16,113,584	16,485,374	△ 371,790
II 負債の部			
1. 流動負債			
未払金	130,000	383,365	△ 253,365
預り金	12,252	12,252	0
前受金	412,850	272,000	140,850
流動負債合計	555,102	667,617	△ 112,515
2. 固定負債			
固定負債合計	0	0	0
負債合計	555,102	667,617	△ 112,515
III 正味財産の部			
1. 指定正味財産	0	0	0
指定正味財産合計	0	0	0
2. 一般正味財産			
その他一般正味財産	15,558,482	15,817,757	△ 259,275
(うち基本財産への充当額)	(5,200,000)	(5,200,000)	(0)
(うち特定資産への充当額)	(7,536,000)	(7,666,000)	(△ 130,000)
一般正味財産	15,558,482	15,817,757	△ 259,275
正味財産合計	15,558,482	15,817,757	△ 259,275
負債及び正味財産合計	16,113,584	16,485,374	△ 371,790

注記

当学会は実施事業資産として下記のもの所有している。

書籍 価額 363,500円

〔第13回定時社員総会 添付書類4-2〕

一般社団法人東洋音楽学会
(様式2-1)

正味財産増減計算書

令和5年9月1日から令和6年8月31日まで

(単位:円)

科 目	当 年 度	前 年 度	増 減
I 事業活動収支の部			
1. 経常収支の部			
(1) 事業活動収入			
基本財産運用収入	730	88	642
基本財産受取利息	730	88	642
特定資産運用益	24	5,837	△ 5,813
特定資産受取利息	24	5,837	△ 5,813
会費収入	4,217,727	4,332,000	△ 114,273
正会員受取会費	3,947,727	4,062,000	△ 114,273
賛助会員受取会費	150,000	150,000	0
特別会員受取会費	120,000	120,000	0
事業収入	1,155,500	1,090,000	65,500
機関誌発行収入	312,000	318,000	△ 6,000
大会広告料収入	314,000	365,000	△ 51,000
大会参加費収入	339,500	389,000	△ 49,500
懇親会費収入	147,000	0	147,000
食料費収入	43,000	18,000	25,000
その他事業収入	0	0	0
受取補助金等	0	0	0
受取負担金	0	0	0
受取寄付金	0	0	0
受取寄付金	0	0	0
雑収入	157	843	△ 686
受取利息	125	12	113
雑収入	32	831	△ 799
経常収益計	5,374,138	5,428,768	△ 54,630
(2) 事業活動支出			
事業費	5,105,413	4,973,406	132,007
給料手当	1,128,666	1,120,000	8,666
臨時雇賃金	191,980	124,992	66,988
法定福利厚生費	4,517	4,258	259
旅費交通費	242,654	191,394	51,260
通信運搬費	467,176	602,973	△ 135,797
消耗品什器備品費	0	0	0
消耗品費	95,583	15,292	80,291
賃借料	763,391	819,051	△ 55,660
印刷製本費	349,695	609,782	△ 260,087
諸謝金	108,000	199,500	△ 91,500
租税公課	600	11,050	△ 10,450
支払負担金	202,000	172,000	30,000
会議費	5,751	12,685	△ 6,934
広報普及費	326,339	357,404	△ 31,065
減価償却費	0	0	0
田邊尚雄賞関連費	114,104	116,002	△ 1,898
会場運営費	214,245	0	214,245
機関誌作成費	564,457	484,997	79,460
例会運営費	23,375	26,510	△ 3,135
懇親会費	201,000	0	201,000
保険料	0	0	0
事務委託費	0	0	0
食料費(雑費①)	63,180	41,500	21,680
慶弔費(雑費②)	9,185	3,410	5,775
手数料(雑費③)	24,096	19,691	4,405
雑費(雑費④)	5,419	40,915	△ 35,496
管理費	528,000	528,000	0

一般社団法人東洋音楽学会

(単位:円)

科 目	当 年 度	前 年 度	増 減
事務委託費	528,000	528,000	0
経常費用計	5,633,413	5,501,406	132,007
評価損益調整前経常増減額	△ 259,275	△ 72,638	△ 186,637
基本財産評価損益等	0	0	0
特定資産評価損益等	0	0	0
投資有価証券評価損益等	0	0	0
評価損益等計	0	0	0
当期経常増減額	△ 259,275	△ 72,638	△ 186,637
2. 経常外収支の部			
(1) 経常外収益			
固定資産売却益	0	0	0
固定資産受贈益	0	0	0
経常外収益計	0	0	0
(2) 経常外費用			
固定資産売却損	0	0	0
固定資産除却損	0	0	0
固定資産減損損失	0	0	0
経常外費用計	0	0	0
当期経常外増減額	0	0	0
当期一般正味財産増減額	△ 259,275	△ 72,638	△ 186,637
一般正味財産増減額	△ 259,275	△ 72,638	△ 186,637
一般正味財産期首残高	15,817,757	15,890,395	△ 72,638
一般正味財産期末残高	15,558,482	15,817,757	△ 259,275
II 指定正味財産増減の部			
受取補助金等	0	0	0
受取負担金	0	0	0
受取寄付金	0	0	0
固定資産受贈益	0	0	0
基本財産評価益	0	0	0
特定資産評価益	0	0	0
基本財産評価損	0	0	0
特定資産評価損	0	0	0
一般正味財産への振替額	0	0	0
当期指定正味財産増減額	0	0	0
指定正味財産期首残高	0	0	0
指定正味財産期末残高	0	0	0
III 正味財産期末残高			
正味財産期末残高	15,558,482	15,817,757	△ 259,275

[第13回定時社員総会 添付資料5]

会員の異動状況 (2023年9月1日～2024年8月31日)

(令和5年)

(令和6年)

●：東日本支部、◆：西日本支部、■：沖縄支部、#：海外在住

会員種別	会 員 数		増減	異 動 の 内 訳
	2023. 9. 1	2024. 8. 31		
正会員	531	527	-4	新入+23、学生より+2、退会-24、逝去-5
学生会員	8	7	-1	新入+5、正会員へ-2、退会-4
賛助会員	3	3	0	
特別会員	6	6	0	
名誉会員	2	2	0	
	550	545	-5	

〔第13回定時社員総会 添付書類 6〕

定款施行細則 新旧対照表

新	旧
<p>第 1 条 <u>この法人の運営は、定款に定めるもののほかは、この施行細則による。</u></p>	<p>第 1 条 <u>この法人には次の支部を置き、原則として下記の範囲に在住する会員を各支部の会員とする。</u> <u>1. 東日本支部</u> <u>新潟、長野、静岡以東の各都道府県</u> <u>2. 西日本支部</u> <u>富山、岐阜、愛知以西で鹿児島以北の各府県</u> <u>3. 沖縄支部</u> <u>沖縄県</u></p>
<p>第 2 条 <u>定款第 3 条によって設置した支部の細則は理事会の議決を経て別に定めるものとする。</u></p> <p>(略)</p>	<p>第 2 条 <u>支部についてはこの法人の定款に準じた支部規程を定めるものとする。</u> <u>2 支部規程は総会の議決を経て定める。</u></p> <p>(略)</p>
<p>第 13 条 理事および監事の選出に際して、選挙管理委員会は選挙用会員名簿を配布する。 2 選挙用会員名簿には、正会員の姓名を記載し、50 音順に配列する。</p> <p>(略)</p>	<p>第 13 条 理事および監事の選出に際して、選挙管理委員会は選挙用会員名簿を配布する。 2 選挙用会員名簿には、正会員の姓名を記載し、<u>支部ごとに 50 音順に配列する。</u></p> <p>(略)</p>
<p>(削除)</p>	<p>第 7 章 <u>会 計</u> <u>第 21 条 各支部は、支部担当理事の中より会計責任者 1 名を置く。</u> <u>第 22 条 各支部は、支部運営に必要な経費に付き、予算を策定して当該事業年度開始前の 4 月の理事会において承認を得なければならない。</u> <u>第 23 条 前条予算の執行に当たっては、各支部の会計責任者が本部事務局に必要金額を請求し、入金を得て支部資金の出納を行う。</u> <u>2 支部資金の出納結果は、半期ごとに理事会へ報告しなければならない。</u> <u>3 決算月（8 月）は速やかに出納を行い、その末日までに本部事務局へ残金の返還を行うものとする。</u></p>
<p>附 則 (略) <u>4 第 1 条・第 2 条・第 13 条の変更および第 21 条から第 23 条の削除は、令和 7 年 9 月 1 日より施行する。</u></p>	<p>(新設)</p>



監査報告書

一般社団法人 東洋音楽学会

会長 小塩 さとみ 殿

令和6年9月30日

(2024年)

監事 澤田篤子 
監事 岡崎淑子 

私たちはそれぞれ、令和5年9月1日から令和6年8月31日までの令和5年度における会計及び業務の監査を行い、次のとおり報告する。

1. 監査の方法の概要

- (1) 会計監査について、会計帳簿並びに関係書類の閲覧など必要と思われる監査手続きを用いて財務諸表等の正確性を検討した。
- (2) 業務監査について、理事会及びその他の会議に出席し、関係書類の閲覧など必要と思われる監査手続きを用いて業務執行の妥当性を検討した。

2. 監査意見

- (1) 令和5年度の財務諸表、すなわち、貸借対照表、正味財産増減計算書及び財産目録並びに収支計算書は会計帳簿の記載金額と一致し、法人の財産状態及び収支状況を正しく表示していると認める。
- (2) 事業報告書の内容は真実であると認める。
- (3) 理事の職務執行に関する不正の行為又は法令もしくは定款に違反する重大な事項はないと認める。

以上

